

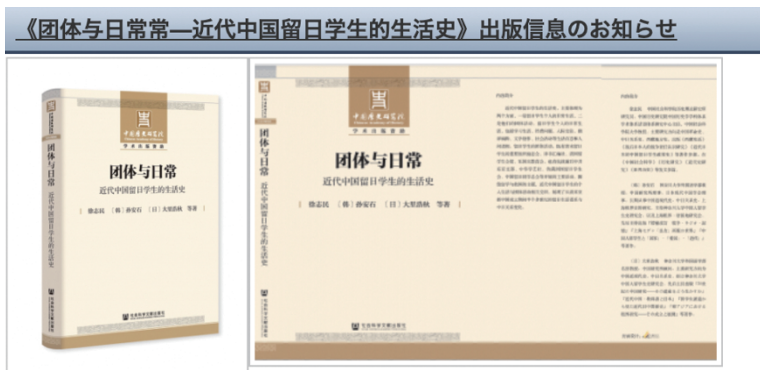
活 動 報 告

共同研究グループ活動報告（2022 年度）	206
購入文献解題	223
所員自著紹介	225
ニューズレター	229

共同研究グループ活動報告（2022 年度）

日中関係史

2022 年度は、対面とオンライン会議を併用しながら研究会を開催した。研究会の記録はすべて <http://chineseovers.jugem.jp/> に掲載している。



社会科学文献出版社，2022 年 8 月刊行予定

また、いままで日本で刊行した論文集の中から関連する論文を選び、『团体与日常：近代中国留日学生的生活史』として刊行することができた（中国・社会科学出版社，2022 年 8 月）。大里浩秋（神奈川大学名誉教授）、孫安石（神奈川大学教授）、徐志民（中国社会科学院歴史研究員）の 3 名が編者を務めた。以下、本年度に開催した研究会活動を簡条書きで記す。

(1) 第 90 回研究会（2022 年 1 月 29 日）

- ① 「東京帝国大学の中国人留学生関係文書を読む」大里浩秋（神奈川大学名誉教授）
- ② 「中国人留学生の日本遊学案内書の系譜を読む」孫安石（神奈川大学）

(2) 第 91 回研究会（2022 年 2 月 26 日）

- ① 「開戦前夜北京の日本人留学生」稲森雅子（九州大学 専門研究員）
- ② 「中華留日基督教青年会について」渡辺祐子（明治学院大学）

(3) 第 92 回研究会（2022 年 3 月 26 日）

- ① 「帝国大学における中国人女子留学生」周一川（日本大学）
- ② 「同仁会と中国人留学生」見城悌治（千葉大学）

(4) 第 93 回研究会（2022 年 5 月 21 日）

- ① 書評『日華学堂とその時代：中国人留学生研究の新しい地平』高田幸男（明治大学）・大里浩秋（神奈川大学名誉教授）・孫安石（神奈川大学）
- ② 「1920, 30 年代中国人日本留学生の管理と生活」張一聞（明治大学博士課程）

(5) 第 94 回研究会（2022 年 7 月 23 日）

- ① 「清末陸軍留学生の学習と生活」木村一樹（東京大学大学院修士課程）
- ② 「日中戦争と来華日本人」譚皓（中国・天津大学）

(6) 第 95 回研究会 (2022 年 9 月 3 日)

- ① 「改革開放期中国の留学生政策——鄧小平の役割を中心に」 張少東 (大阪大学修士・修了)
 - ② 「日本と南アジアの孔子学院について」 三浦明子 (東洋大学非常勤講師)
- コメンテーター・荒川雪 (東洋大学教授), 白土悟 (九州大学総合研究博物館専門研究員)

(7) 第 96 回研究会 (2022 年 10 月 8 日)

- ① 「『中華留学教育史録』にみる中華人民共和国の留学生政策」 川島真 (東京大学)
- ② 「戦後の中国留日同学総会と日共中国人支部との関係を中心に」 荒川雪 (東洋大学)

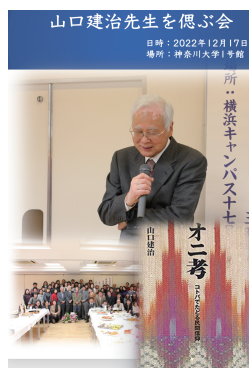
(8) 第 97 回研究会 (2022 年 12 月 3 日)

- ① 報告「清末の五校特約成立過程の再検討」 胡穎 (神奈川大学, 非常勤)
- コメンテーター: 大里浩秋 (神奈川大学名誉教授)

(文責 孫安石)

「山口建治先生を偲ぶ会」

神奈川大学の元理事, 元外国語学部長, 名誉教授である山口建治先生を偲ぶ会が, 2022 年 12 月 17 日, 本館の 8 階で開かれた。山口先生は 2020 年 12 月 2 日に逝去されたが, コロナ禍の影響で偲ぶ会の開催は延期をやむなくされ, この度三周忌をむかえ開催になった次第である。



(写真左—偲ぶ会の横断幕, 写真右—偲ぶ会の集合写真)

偲ぶ会は, 山口先生とともに神奈川大学中国語学科設立に関わった鈴木陽一先生の挨拶から始まり, いまからおおよそ 30 年以上前の 1980 年代に中国語学科を設立するときの様々な秘話が紹介された。

次は中国の上海師範大学の教授で, かつて神奈川大学中国語学科の特任教授を務めた厳明先生からの手紙が在日のご子息公泰さんより中国語と日本語で代読された。そこには中国研究者である山口先生が蘇州の方言を勉強したときの思い出から始まり, 山口先生と一緒に語り合った中国の民俗研究の話し, 一緒に酌み交わした酒と料理の数々が紹介され, ほのぼのと優しい山口先生を思い出させる内容であった。

我是嚴明，現任上海師範大學教授，曾任神奈川大學中國語學科客座教授。山口建治教授是我最早認識的日本人朋友。今天理應到神大送花圈。限於疫情，不能來日。至歉甚憾。吾不能至而心幾臨，特委託志才嚴公參加送花圈，表達我的懷念。

我與山口老師的初次見面，是1984年9月初的一個上午，在中國北京師範大學中文系辦公室。當時山口老師到北師大送修民間文學，因研究為主題《莊子》而與魯迅先生和周作人先生。我是蘇州人，在北師大畢業留校，正好幫助山口老師學吳方言。這樣的緣分讓我們結識，而交往和友誼一直持續了36年。

我們一起遊歷過北京、蘇州、常熟、上海、橫濱、東京、瀋陽、仙台、長崎、平戶島、長野；一起喝過各種啤酒（山口老師最愛）、清酒、威士忌、紹興酒、麥芽酒、五糧液；一起吃過各種點心、湯包、餛飩、麵食、上海大饅頭、各種生魚片、牡丹鍋；直到2020年12月，山口老師因病仙逝。今天不流淚，因為浮現腦海的一直是山口老師憨厚的笑臉。

今天張總再赴蘇州太湖大堤，因為36年前陪著山口老師登上太湖大堤，望著浩翰的湖面，他輕聲說「好懷念呀，與我家鄉一樣的景色」！「我後來才知道，山口老師的家鄉在四圍（香川），有著與江南九曲一樣美麗的瀟湘水鄉。好懷念呀，過去的快樂時光，有美景、美食、美酒、美韻，還有象山口老師這樣一位令人難忘的好友。以上，敬拜。



（写真左一嚴明先生的手紙，写真右一山口ゼミ生）

そのほかに、大阪外語大時代の友人と東北大学時代の友人の皆様からは、1970年代の日本の学生運動の真っ只中の山口先生と過ごされた青春の思い出が紹介された。

また、山口先生のゼミ生からは、学生の間では、ひそかに「ヤマちゃん」、または「ヤマケン」と、親しみを込めた別称として呼ばれたことや、授業中の指導が厳しく、時には学生を泣かせてしまったエピソードなども紹介された。



（写真左一山口先生の行きつけの福臨門にて，写真右一山口小枝様の織もの記念品）

最後に奥様の山口小枝様（織もの作家）からは偲ぶ会を開催した皆様に対するお礼の言葉と記念品として制作された手作りのブックカバーが渡された（ブックカバーのデザインは、山口先生の研究テーマであったオニをかたどったもの）。

（文責 孫安石）

言語変異研究

1. 今年度の主な研究内容：

今年度は主に言語景観に関する生態言語学的研究，対照言語史に関する資料調査と執筆活動を行った。

2. 今年度の主な研究成果：

①講演活動：

日本歴史言語学会 2022 年度大会（2022 年 12 月 10 日於・学習院大学）のシンポジウム「日中英独仏・対照言語史——語彙の近代化をめぐる」において，講演「中国語の語彙近代化と言語生態——新語の群生と「適者生存」のメカニズム」を行った。

②執筆活動：

単著『都市空間の言語生態——上海の言語景観と道路命名の歴史』（くろしお出版，2023年2月刊行）を完成した。

3. 今年度購入された主な研究所所蔵資料：

『抗日战争期间中日间的宣传战（1937-1945）』

『图像学与中国美术史研究』

『东莞蛋民研究』

『中華大藏經 続編 19～31 漢傳注疏部（二）』

4. 2023年度は引き続き社会言語学，歴史言語学に関する研究調査を実施する予定である。

（文責 彭国躍）

〈身体〉とジェンダー

1. 講演会・研究会の開催

・第1回研究会

開催日：2022年8月5日（月）

会 場：オンライン&対面（みなとみらいキャンパス 17017）

発表者（所属）：信岡朝子（東洋大学文学部日本文学文化学科）

「狩猟と男性性——北米におけるホワイト・ハンター神話と「存在の大いなる連鎖」

最初に世紀転換期アメリカのセオドア・ローズベルト大統領と熊狩りという，テディベアの起源となったエピソードの内実やイメージの転換が紹介された後，大統領の伝記などに出てくる博物学者や自然保護主義者という人物像が，同時代（金ぴか時代から進歩の時代へ）の思想とのかかわりで分析された。病弱であった幼年期，「女々しい」とも揶揄された過去と，それゆえの男性性の発露の関係が示された後，二つの男性性，**manliness** と **masculinity** という概念装置での分析が試みられた。**manliness** が自制心や抑制を基調とし，弱き存在を守るといった，ある種貴族主義的な姿勢であるのに対して，**masculinity** は身体的・性的側面が強い男性性で，攻撃的であったり，非白人種や下層階級が持つとされた野蛮さを白人男性が取り込んでいったりしたものであった。前者から後者への移行，さらには両者の関係性を見る必要が指摘された。

そこには文明が過度に進み衰退した白人種が力を取り戻すという歴史観が見られるが，その背景として，ダーウィンの進化論も飲み込むような「存在の大いなる連鎖」という思想があった。そうした視点に沿って，狩猟といった野外活動を重視し，対外的には帝国主義的拡張を進めたシンボルとして，ローズベルト大統領は位置づけられるとまとめられた。また，**manliness** から **masculinity** への移行によって，上位人種の「野蛮化」という矛盾が現れるが，それを解消するものとして白人においては男女差が強調され，男性が女性を庇護・管理するように，人間は動物を庇護・管理するという並行関係が強調された。「弱きを助け強きを挫く」といった価値観は，大統領が設立した **Boone & Crockett Club** に見られるものであり，自然保護と人種主義的エリートイズム，家父長制的価値観の接合を，同時代思潮との関連で読み解いていくことの意義が論じられた。

講演を受け，アメリカという国の歴史と狩猟のかかわりや，女性ハンターの問題，また現代の動物保護思想や大統領との時代を越えたつながりについて議論を行った。グループ外からの参加者も多く，議論が活発に行われた。

・第2回研究会

開催日：2022年9月16日（金）

会 場：オンライン&対面（みなとみらいキャンパス 17017）

発表者（所属）：江崎聡子（聖学院大学人文学部 欧米文化学科 准教授）

「エドワード・ホッパーの女たち」

2022 年春に出版された『エドワード・ホッパー作品集』（東京美術）の著者である江崎聡子氏に、ホッパーというジェンダーという観点から、アメリカ的な画家と言われることも多いホッパーの隠された面について論じていただいた。

ヨーロッパの影響を存分に受け、同時代のアメリカの都市文化に距離をおいていたホッパーが、逆説的に露呈されたアメリカ的なものについて、女性や労働者、消費文化といった面から考察された。ホッパーにおいてジェンダーや人種、階級を考えることの難しさについても指摘され、ホッパー本人が意識せず、目に入らなかった、あるいは目に入らなかったマイノリティの観点から考えることの意義が議論された。

2. シンポジウムの開催 なし

（ただし、本研究グループに所属する村井まや子氏、秋山珠子氏を中心となって、国際シンポジウム・映画上映会・絵本展「**Storied Environments** 物語る環境」が、10 月 15 日（土）・16 日（日）にみなとみらいキャンパス 1F 米田吉盛記念ホールで開催された。本シンポジウムでは、ジェンダーや動物性の問題も環境というテーマと関連づけられて議論された。）

3. 活動内容

〈身体〉とジェンダー研究会は『男性性を可視化する——〈男らしさ〉の表象分析』を 2019 年度に出版したが、その後に続く企画として、2020 年度から「動物」や「種」とジェンダーの関わりをテーマにした叢書の出版を目指して、学内・学外から多くの新メンバーを集め研究会を組織している。前年度の 2022 年 2 月 18 日に行われた研究会で、動物性とジェンダーの表象を考えることの叩き台が示され、それを受けて、2022 年度も講演・議論を重ねることで叢書の準備を進めていくこととした。

第 1 回研究会では、『快樂としての動物保護——『シートン動物記』から『ザ・コーヴ』へ』（講談社選書メチエ）の著者である信岡朝子氏を招待して、20 世紀初頭のアメリカにおいて狩猟と男性性がどのように関連づけられてきたかをめぐる講演を行ってもらった。

第 2 回研究会では、本研究グループ所属で『エドワード・ホッパー作品集』（東京美術）の著者である江崎聡子氏が、「エドワード・ホッパーの女たち」について発表を行った。視覚芸術とジェンダー、20 世紀アメリカ社会との関連を見ることで、今後の共同研究の基盤を共有した。

第 3 回研究会は、2023 年 2 月あるいは 3 月に開催予定である。

（文責 熊谷謙介）

自然観の東西比較

1. 研究会の開催

第 1 回研究会

開催日：8 月 3 日（水）

会 場：MMC 19 階 19031 教室 + Zoom

発表者（所属）：中村隆文先生（本学国際日本学部日本文化学科）

演 題：「辺境の〈ケルト〉——ロゴス化されない自然観を通じた、東西の思想比較——」

第 2 回研究会

開催日：11 月 30 日（水）

会 場：MMC 16 階 16032 教室 + Zoom

発表者（所属）：ブライアン ルパート先生（本学国際日本学部国際文化交流学科）

演 題：「木が語る中世仏教文化——木像（本尊）、御衣木、「草木成仏」の言説を中心に——」

第3回研究会

開催日：12月22日（木）

会 場：MMC 16階 16032教室 + Zoom

発表者（所属）：角南聡一郎先生（本学国際日本学部歴史民俗学科）

演 題：「伝承を読み解く素材」

2. シンポジウムの開催

なし

3. 活動内容

今年度は3回の研究会を開催した。それぞれ1時間程度の発表があり、その後1時間半程度、質疑応答などの議論を行った。参加者はZoom参加を含め毎回7名程度であったが、第2回研究会の際には留学生の参加もあり、有益な情報交換がなされた。発表のテーマは、ヨーロッパの〈ケルト〉文化、日本中世の仏教儀礼、民俗学（考古学）における伝承の意義など、時代や地域などが様々であり、自然景観（山・岩・木・海など）をめぐる信仰（キリスト教とそれ以前の基層信仰、日本の神道と仏教）や生活など、自然観をめぐる東西比較のみならず時代による変遷などについても有益で活発な議論が交わされた。

（文責 上原雅文）

ヒト身体の文化的起源

活動なし

日中韓対照言語研究

本研究会は、2020年度からすそ野を広げ、中国語を加えた形で新しいメンバーも迎え、本格的に「日中韓対照言語研究」をすすめることにした。今後より積極的に取り組んでいきたい。

研究会の開催

- (1) 日 時：2023年2月28日（火）15：00～17：00（予定）

場 所：Zoom

発表者：尹 亭仁（本学 国際日本学部国際文化交流学科教員）

テーマ：日中韓3言語における共通漢語の現状

- (2) 日 時：2023年3月16日（木）15：00～17：00（予定）

場 所：Zoom

発表者：鈴木 慶夏（本学 外国語学部中国語学科教員）

テーマ：多言語対照研究に向けた中国語からの考察点

年2回以上の研究会の開催を計画し、活性化を試みている。対照言語研究の観点から日中韓以外の言語の研究者にも参加を呼びかけている。メンバーによる発表に加え、海外の研究者にも参加と発表を呼びかけている。

（文責 尹亭仁）

各国近代文学の研究

1. 講演会・研究会の開催

第1回研究会

開催日：2022年12月26日

会場：ZOOM 開催

講演者：小澤裕之氏（早稲田大学）

演題：マルシャーク『森は生きている』について

2. 活動内容

本研究グループは、活動7年目となる。研究対象の時期的な重なりを基軸に据えながらも、研究をめぐり方や環境・場の異なりについて相互に意識し、意見交換をしながら、領域横断的な近代文学研究の方向性を模索していく。講演会による講師のレクチャーから多くの知見や刺激を得たことはもとより、さまざまな専門領域、方法論を携えたメンバーによる、それぞれの立場から質疑・意見交換を行い、お互いの知見を深めた。

（文責 松本和也）

知覚認知システムの普遍性と多様性

講演会・研究会の開催：なし

シンポジウムの開催：2回

The 4th Symposium on Perception and Cognition Systems for Nature of Plausibility

Date and time: Friday, 18 March 2022, 17:00-20:00 (JST)

Venue: The symposium will be held online through Zoom (ID/Passcode will be provided to registered participants).

Language: English

Program

1. Is Chromatic Motion System Lateralized?

Haruyuki KOJIMA (Kanazawa University)

Visual psychologists have long assumed, in general, that our visual sensitivity to the visual world is best at the center in the visual field and concentric to the eccentricity, so that it is not biased either to the right or left of the visual field. However, sometimes, studies have reported a-symmetries in our visual perception, such as color perception and motion perception. The present talk will introduce our study that have investigated hemispheric sensitivity to chromatic motion perception. A series of experiments examined sensitivities of two visual hemifields for isoluminance points, detection thresholds, and motion thresholds with chromatic or achromatic stimuli. We will discuss our experimental results from the points of view of visual pathway as well as visual perceptual mechanism.

2. A Kalman filter model for adaptation to delayed auditory feedback in adults who stutter

Nobuhiko ASAKURA (Center for Mathematical Modeling and Data Science, Osaka University)

Sensorimotor integration is crucial for efficient speech production, and its dysfunction may be related to the speech disorder of stuttering. Recent evidence shows a stronger effect of adaptation to delayed auditory feedback (DAF) in adults who stutter than in fluent controls. Here, I present a Kalman filter model of DAF adaptation. This model estimates the delay of auditory reafference by optimally combin-

ing its prediction with the actual sensory measurement of auditory signals. The model predicts that the effects of DAF adaptation become stronger either when the precision of prediction decreases or when the precision of the measurement increases. Fitting the model to behavioral data reveals that adults who stutter are more imprecise in their prediction of reafferent auditory feedback delays, and that the degree of imprecision is correlated with their stuttering severity.

The 3rd Symposium on Perception and Cognition Systems for Nature of Plausibility

Date and time: Tuesday, 22 February 2022, 17:00–19:10 (JST), 8:00–10:10 (GMT)

Venue: The symposium will be held online through Zoom (ID/Passcode will be provided to registered participants).

Language: English

Program: “Music as confluence of perceptual, cultural, and aesthetic plausibility”

1. Effects of beat on the occurrence of the time-shrinking illusion

Emi Hasuo (Hiroshima University/Japan Society for the Promotion of Science), Yuu Masuda (Taisho University), & Hiroshi Arao (Taisho University)

Rhythm and beat are both temporal aspects related to perceptual plausibility in music. Rhythm refers to the more ‘local’ aspect of temporal perception, and is said to be based on the durations of neighboring time intervals between successive sounds. Beat, on the other hand, refers to a more ‘global’ aspect of temporal perception, and is a sense of steady pulse in a sound sequence. Although rhythm and beat are potentially related, they have been conventionally considered as distinct time structures that engage different perceptual processes. Here, we focus on an illusion in rhythm perception (‘local’ time perception) called “time-shrinking”, and examined whether the occurrence of this illusion is influenced by beat (‘global’ context). Experiments showed that time-shrinking is diminished when the beginning of the time-shrinking pattern does not coincide with the beat induced by the preceding sounds, suggesting a clear influence of beat (‘global’ context) on rhythm perception (‘local’ time perception).

2. How do we acquire the sense of culture-specific musical plausibility?

Rie Matsunaga (Kanagawa University)

Similar to the language-syntactic schemas, listeners implicitly acquire the music-syntactic schemas (related to keynote and musical scale) through mere exposure to their native music. The music-syntactic schemas underlie the sense of melodic Gestalt (including melodic coherence, well-formedness, and plausibility) for pitch structure of music. In this talk, I start with explaining what music-syntactic schemas adult listeners have in their brains and the extent to which listeners from different cultures are similar in the sense of melodic Gestalt. Then, I introduce my computer simulation work that reveals how children rapidly start off learning the culture-specific schemas in spite of no direct or explicit teacher signals about the keynote and scale of each musical piece.

3. Understanding audience effects in musical performance

Haruka Shoda (Ritsumeikan University)

In the Western art tradition, musical performance is intended to deliver the performer’s own artistic/musical interpretations to the audience. The performer manipulates musical sounds (i.e., motor control) by regulating their psychophysiological states to achieve this purpose. In the presence of an audience, the performance sometimes sounds better (social facilitation) and at other times sounds worse (social inhibition). In this talk, I will introduce empirical research exploring the mechanism of audi-

ence effects in musical performance. The methodologies involve measurements of acoustic performance parameters, body movements, electrocardiograms, and the audience's psychological evaluation. The presence of an audience broadly affects the performer's psychological (e.g., state anxiety) and physiological states (e.g., autonomic nervous system). When the performer's psychophysiological state levels, probably modulated by task difficulty, are optimized, the quality of the performance increases due to the presence of an audience.

活動内容：

本研究グループは、人の知覚・認知の仕組みについて、研究することを目標としており、特に、知覚の様相や認知的様相に共通な普遍性とそれらの様相の相互効果によって展開した多様性を現象・行動観察や計算論的解析などを通して明らかにする活動を行うために共同で取り組んでいる。

本年度は、「尤もらしさ感と違和感の知覚・感性・認知科学的機序の解明」を促進するために、2回のシンポジウムで当該分野の国内の第一人者の研究者5名に公演を依頼し、参加者による活発な議論とともに盛況に終わった。

2022/12/05

(文責 吉澤達也)

学びの見える化

(1) 研究会の趣旨

これまで専門職の人材育成の見える化を行い、教育・学習のあり方や体系化を検討する研究会を実施してきた。今年度は、これまでの研究成果を「人文学研究所叢書」の出版に向けた編集作業及び発行を行うことを主たる事業とした。

(2) 研究メンバーと担当箇所 (☆人文学研究所研究員及び客員研究員)

○編集委員

齊藤ゆか (神奈川大学人間科学部教授) ☆第1章, 第4章2, 3, 4, 第5章2

森和夫 (一般財団法人職業教育開発協会代表理事) ☆第1章3, 第2章2, 4, 第3章1, 3, 第6章2

西村美東士 (聖徳大学児童学部元教授・現非常勤講師) ☆第2章1, 3, 第4章5, 第6章1

○執筆者

岩堀嘉仁 (トヨタ自動車株式会社・車両技術開発部組長) 第3章2

高橋陽一 (トヨタ自動車株式会社・車両技術開発部チームリーダー) 第3章2

松下祥子 (医療法人聖心会・かごしま高岡病院・総看護師長) 第3章4

安藤めぐみ (株式会社コーエイ・リサーチアンドコンサルティング, コンサルティング事業部教育グループ) ☆第3章5

久米篤憲 (株式会社 PASC 代表) ☆第4章1

長浜洋二 (モジヨコンサルティング代表) ☆第4章3

山本直輝 (公益財団法人ハーモニセンター理事) 第4章4

小桐間徳 (神奈川大学理事長付特別審議役) 第5章1

大瀬恵子 (一宮研伸大学看護学部講師) ☆第5章3

鈴木英夫 (神奈川大学法学部教授・教職課程/社会) ☆第5章4

太田早織 (神奈川大学人間科学部助教・教職課程/体育) ☆第5章5

菅沢茂 (実践女子大学元教授) ☆第5章6

(3) 成果：出版物のタイトル及び目次

○タイトル

『学びの見える化の理論と実際～教育イノベーションにむけて～』

(神奈川大学人文学研究叢書 48)

○目次

〈理論編〉

第1章 なぜ、「学びの見える化」するのか

第2章 「学びの見える化」モデルの方法論

〈実践編〉

第3章 企業における「学びの見える化」の実践

第4章 行政・非営利組織における「学びの見える化」の実践

第5章 学校における「学びの見える化」の実践

第6章 学びの見える化方法論の課題と展望

(4) 編集委員会の実施程度

月2回の編集委員会を実施した。2023年3月中には発行予定。

(文責 齊藤ゆか)

芸術（アート）と物語の交雑／発信力

1. 講演会・研究会の開催

第1回研究会

開催日：2022年8月23日

会場：ZOOM 開催

講演者：藤井光氏（現代美術家）

演題：〈続〉日本の戦争美術

第2回研究会

開催日：2023年2月20日（予定）

会場：ZOOM 開催

講演者：藤澤茜氏（本学国際日本学部）

演題：（未定）

活動内容

本研究グループは、2020年秋に結成したもので、今年度は3年目となる。今年度中の活動としては、各自が研究会テーマに即した活動を個々に進めつつ、問題関心をすりあわせていった。なお、全体の活動としては、上記2回の講演会を催し、戦争画をめぐる近代／現代美術および浮世絵について、具体的な題材を元に、社会と芸術の関係について知見を広めることができた。

(文責 松本和也)

おとぎ話文化研究

今年度はメンバー各自がおとぎ話文化に関する研究調査と研究成果の公表を行い、互いの研究内容についての意見交換を継続的に行うと同時に、以下のイベントを企画し、開催した。

1. 人文学研究所主催シンポジウム「Literature Goes to School 教室の中の文学 ― 明治・大正期を中心に」

日 時：2022 年 9 月 3 日（土）14：00-16：30

場 所：神奈川大学みなとみらいキャンパス 米田吉盛記念ホール（オンライン併用）

登壇者（敬称略）：メレック・オータバシ（サイモン・フレイザー大学／神奈川大学）、柿本真代（京都華頂大学）、宮路大朗（早稲田大学）、加藤節子（東京子ども図書館）、鈴木宏枝（神奈川大学、本共同研究グループメンバー）、村井まや子（神奈川大学、本共同研究グループ代表）

2. 神奈川大学国際交流事業「Storied Environments 物語る環境」

日 時

シンポジウム：2022 年 10 月 15 日（土）10：00-16：00

映画上映会＋トーク：10 月 16 日（日）10：00-18：00

展 示：10 月 14 日（金）～10 月 28 日（金）

場 所：神奈川大学みなとみらいキャンパス 米田吉盛記念ホール（オンライン併用）

登壇者（敬称略）：John Parham（ウスター大学）、Desdemona McCannon（ウスター大学）、Manuela Adreani（挿絵画家）、章夢奇（映画監督）、V. Geetha（タラブックス）、諏訪敦彦（映画監督、東京藝術大学）、山城知佳子（映像作家、東京藝術大学）、秋山珠子（神奈川大学）、アレハンドロ・モラレス・ラマ（神奈川大学）、大和田正人（神奈川大学）、村井まや子

なお、上記シンポジウムと映画上映会の講演の一部を『神奈川大学評論』102 号（2023 年 3 月刊行予定）の小特集「物語る環境」として出版する予定である。

3. オーストラリア政府豪日交流基金助成イベント「Festival of the Fantastic」

1. Fairy-Tale Video Art by Fuyuhiko Takata: Screening and Conversation with Fuyuhiko Takata

2. Stitching Wonder: Workshop II with Tomoko Konoike

日 時：2022 年 11 月 19 日（土）14：00-16：00、17：00-19：00

場 所：神奈川大学みなとみらいキャンパス 5008 教室（オンライン併用）

登壇者：高田冬彦（アーティスト）、鴻池朋子（アーティスト）、村井まや子

上記に加えて 2023 年 3 月 11 日（土）に、本共同研究グループに所属する人文学研究所客員研究員の中脇初枝氏の再話と編集による『世界の女の子の昔話』（偕成社）の刊行を記念して、「『世界の女の子の昔話』を読む会」を本学で開催する予定である。

（文責 村井まや子）

神奈川の地域と文化

本研究は、横浜をはじめとする神奈川県のあるさまざまな地域の文化・歴史・民俗・地理・観光の諸相について、本学に集う様々な領域（観光学、考古学、地理学、民俗学、歴史学など）の研究者たちが集い、それぞれの強みを活かしつつ他の領域の手法からも刺激を受けながら、学際的に探究していくことを目指している。最終的には、本研究の成果を『大学的神奈川ガイド』と題した叢書として出版したうえで、講義・ゼミをはじめとする本学における様々な教育機会に活かし、人文学に根差した神奈川へのまなざしを神大生のアイデンティティーのなかに根付かせることを目指すものである。

コロナ禍により第 1 回研究会は対面ではなくオンライン（Zoom）での開催となったが、第 2 回研究会はみなとみらいキャンパスでの教室と Zoom とのハイブリッド形式で開催することができた。

民俗学・地理学・歴史学・観光学といった学内の様々なディシプリンの研究者たちに、さらに学外から各トピックの第一人者の研究者も客員所員として加わり、活発な議論が展開されつつある。

以下、本年度に開催した研究会活動を箇条書きで記す。

（1）第 1 回研究会

- ◎日時：2022 年 4 月 27 日
- ◎形式：zoom 会議
- ◎内容：各メンバーの自己紹介、および執筆予定のテーマについて報告
- (2) 第 2 回研究会
- ◎日時：2022 年 9 月 18～19 日
- ◎形式：ハイブリッド（みなとみらいキャンパス教室 + Zoom）
- ◎内容：各メンバーから、執筆内容の進捗状況について報告
- (3) 第 3 回（予定）
- ◎日時：2023 年 3 月 28 日
- ◎会場：みなとみらいキャンパス教室
- ◎内容：各メンバーから、執筆内容の進捗状況について報告

（文責 平山昇）

観光と美術

1. 研究会の開催

第 1 回研究会

開催日：2022 年 5 月 30 日（月）

会 場：カフェベローチェ横浜関内

参加者：島川崇、角山朋子、クインタナ・シェラー、増子美穂

検討内容：本研究グループを立ち上げるにあたって、観光と美術の関係性について、研究員同士の意見交換を実施した。

第 2 回研究会

開催日：2023 年 1 月 23 日（月）

会 場：MMC 11 階教員ラウンジ

参加者：島川崇、角山朋子、クインタナ・シェラー、増子美穂

検討内容：「観光資源」に代わりうる用語の検討、急進的環境団体の美術館・美術品への毀損に対する抗議の声明の検討。

2. シンポジウムの開催

「デザインミュージアムのヴィジョン」

開催日：2022 年 7 月 9 日（土）

会 場：MMC 米田吉盛記念講堂

登壇者：暮沢剛巳（東京工科大学デザイン学部教授）

太刀川英輔（JIDA 理事長／NOSIGNER 代表）

花井久穂（東京国立近代美術館主任研究員）

深川雅文（インディペンデント・キュレーター／クリティック）

横山いくこ（リード・キュレーター デザイン&建築部門 M+香港）

MC 角山朋子（デザイン史学研究会代表、神奈川大学国際日本学部准教授）

内 容：2022 年、デザイナー三宅一生の国立デザインミュージアム設立宣言から 10 年を経て、あらためてデザインミュージアムの現在と未来の可能性を考える。

近年、人びとの生活にかかわるデザイン、工芸、プロダクトなどをテーマとする展覧会が増えているが、日本にはいまだ国立のデザインミュージアムは存在しない。デザインをミュージアムの領域にいか

に組み込んでいくのかという課題，そして日本でのデザインミュージアムのあり方についての議論をさらに推進するために，研究者，キュレーター，デザイン関係者によるトークとパネルディスカッションを実施した。なお，本シンポジウムが実施されたことについて，NHK，国立新美術館主催「DESIGN MUSEUM JAPAN 集めてつなごう日本のデザイン」（国立新美術館，会期 2022/11/30～12/19）の関連年表に記載された。

3. 活動内容

本年度は，研究グループ発足に際し，この新しい研究分野を開拓するにあたり，それぞれの研究員の問題意識の共有からスタートしている。また，デザイン史学研究会と共催でシンポジウム「デザインミュージアムのヴィジョン」を開催することができたことは大きな収穫であった。これらのディスカッションを通して，2023 年度または 2024 年度に叢書を執筆したいと考えている。

（文責 島川崇）

言語景観と多文化共生

本研究グループは，2020～2022 年度の学内共同研究奨励助成金を受け，「多文化共生社会の言語景観——観光立国日本の多言語表示と情報発信を再考する——」という研究課題にとりくんでいる。2022 年度は下記第 1 回研究会で各メンバーの問題意識や今後の方向性を報告・検討することから研究活動を開始した。その後，毎月の研究会を継続的に開催しながら，年度後半からは，コロナ禍で予定どおりにいかなかった現地調査を徐々に実施できるようになった。現在は，2024 年度に成果物を刊行する計画のもとで研究活動を展開している。

(1) 研究会の開催

第 1 回研究会

開催日：4 月 28 日（木）19：00～21：30

会 場：Zoom

発表者：李忠均（本学国際日本学部教員）

テーマ：京都市・大阪市における言語景観——韓国語を中心に——

第 2 回研究会

開催日：5 月 26 日（木）19：00～21：30

会 場：Zoom

発表者：尹亨仁（本学国際日本学部教員）

テーマ 1：近年刊行書籍に見る言語景観研究の動向

テーマ 2：日本の言語景観にみる韓国語表示の諸相

第 3 回研究会

開催日：6 月 30 日（木）19：00～21：30

会 場：Zoom

発表者：佐藤梓（本学経営学部教員）

テーマ：公園の言語景観から【日本語のみの表示】の課題を検討する
—— プレ調査の報告 ——

第 4 回研究会

開催日：7 月 29 日（木）19：00～21：30

会 場：Zoom

発表者 1：鈴木幸子（本学国際日本学部教員）

テーマ1：ボライトネス理論の観点から考える情報発信——警告、注意、依頼——

発表者2：羽場久美子（本学国際日本学部教員）

テーマ2：少子高齢化と多文化共生——移民・難民：あなたはどうすべきか？——

第5回研究会

開催日：8月12日（金）17：00～19：30

会場：Zoom

発表者1：由川美音（本学外国語学部教員）

テーマ1：観光案内所の言語景観について

発表者2：高木南欧子（本学国際日本学部教員）

テーマ2：キャンパスにおける留学生の言語景観

第6回研究会

開催日：8月29日（月）17：00～19：30

会場：Zoom

発表者1：小林潔（本学国際日本学部教員）

テーマ1：ロシア語・ウクライナ語をめぐる最近の動向について

発表者2：鈴木慶夏（本学外国語学部教員）

テーマ2：中国語パンフレットの情報提供から考える観光行動の支援方法

——北海道の地域特性・中国語の表記特性・中国語圏の社会事情との関連で——

第7回研究会

開催日：9月16日（金）17：00～19：30

会場：Zoom

発表者1：李忠均（本学国際日本学部教員）

テーマ1：日本語のハングル表記——現状と問題点——

発表者2：尹亨仁（本学国際日本学部教員）

テーマ2：ソウルの言語景観・2022——日本における韓国語教育に役立てる取り組みを模索して——

第8回研究会

開催日：9月29日（木）17：00～19：30

会場：Zoom

発表者1：鈴木幸子（本学国際日本学部教員）

テーマ1：観光から多文化共存へと発展した町、ニセコ

発表者2：由川美音（本学外国語学部教員）

テーマ2：古都3都市の言語景観観察記——訪日外国人の視点から——

第9回研究会

開催日：10月28日 19：00～21：30

会場：Zoom

発表者1：高木南欧子（本学国際日本学部教員）

テーマ1：キャンパスにおける留学生の言語景観3——北海道大学出張報告——

発表者2：羽場久美子（本学国際日本学部教員）

テーマ2：沖縄をハブとし、東アジアの平和ネットワークづくり——戦争にならないために——

第10回研究会

開催日：1月26日（木）17：00～19：30

会場：Zoom

発表者 1：尹亨仁（本学国際日本学部教員）

テーマ 1：中国における言語景観と多言語表示——北京・重慶・成都を中心に——

発表者 2：佐藤梓（本学経営学部教員）

テーマ 2：公園施設の言語景観から「日本語のみの表示」の課題を検討する——札幌・弘前・名古屋の調査から——

第 11 回研究会（予定）

開催日：2 月 27 日（月）17：00～19：30

会 場：Zoom

発表者 1：鈴木幸子（本学国際日本学部教員）

テーマ 1：（仮）東南アジアの観光地で見られる英語表現の比較——行為を促す表現を支えるポライトネス・ストラテジ——

発表者 2：鈴木慶夏（本学外国語学部教員）

テーマ 2：（仮）多文化共生の光と影
——対外的知名度向上がもたらす観光リピーターと地元住民への影響——

第 12 回研究会（予定）

開催日：3 月 27 日（月）17：00～19：30

会 場：Zoom

内容協議中

(2) 海外調査

- 尹亨仁：2022 年 7 月 17 日（月）～7 月 22 日（金）
[ソウルの言語景観と多言語表示の調査]
- 李忠均：2022 年 8 月 23 日～9 月 1 日
韓国（ソウル市・慶州市）の言語景観調査
- 尹亨仁：2023 年 1 月 2 日（月）～1 月 6 日（金）
[重慶・成都の言語景観と多言語表示の調査]
- 佐藤梓：2023 年 2 月 20 日～3 月 1 日
メキシコ国立自治大学、メキシコシティ及びモンテレイ市の言語景観調査
- 鈴木幸子：2023 年 2 月 20 日～2 月 24 日
タイ王国・バンコク市の観光英語・言語景観の調査
- 高木南欧子：2023 年 2 月 20 日（月）～2 月 25 日（土）
メキシコ [メキシコ国立自治大学における言語景観のランドデザイン]
- 尹亨仁：2023 年 2 月 23 日（木）～2 月 26 日（日）（予定）
[上海の言語景観と多言語表示の調査]
- 李忠均：2023 年 2 月 23 日～3 月 1 日（予定）
[韓国の言語景観・多文化共生の調査]
- 鈴木幸子：2023 年 3 月 13 日～3 月 16 日
シンガポール・シンガポール市の観光英語・言語景観調査

(3) 国内調査

鈴木慶夏：2022 年 8 月 12 日～8 月 16 日

[北海道の言語景観調査]

高木南欧子：2022 年 8 月 25 日（木）～8 月 26 日（金）

北海道大学 [観光地におけるキャンパスの言語景観]

佐藤梓：2022 年 10 月 27 日～10 月 30 日

[北海道大学, 札幌市及び苫小牧市の言語景観調査]

佐藤梓：2022 年 12 月 20 日～12 月 21 日

[弘前大学及び弘前市の言語景観調査]

鈴木慶夏：2023 年 1 月 18 日～1 月 21 日

[北海道の言語景観調査]

鈴木幸子：2023 年 3 月 7 日～3 月 9 日（予定）

神戸市の言語景観調査

(4) 講演会の開催

開催日：6 月 24 日（金）15：20～16：50

会 場：本学・Zoom

演 題：これからのインバウンド観光の見通しと JNTO の戦略

講演者：蔵持京治氏（JNTO 理事）

開催日：11 月 25 日（木）17：10～18：50

会 場：Zoom

演 題：コロナ禍以降のアメリカ，ドイツ，イギリスの言語景観——日本の言語景観との比較——

講演者：齋藤葵氏（本学卒業生，ノースウェスタン大学大学院博士課程）

開催日：12 月 6 日（火）15：20～16：50

会 場：本学・Zoom

演 題：多文化共生都市——神戸——

講演者：曹英生氏（南京町商店街振興組合理事長）

(5) 研究成果

尹亨仁（2023）「日本の多言語表示にみる日中韓 3 言語の共通漢語」『人文学研究所報』69 pp. 1-21 神奈川大学人文学研究所

（文責 鈴木慶夏）

国際日本研究

1. 講演会・研究会の開催

第 1 回講演

開催日：2022 年 6 月 29 日（水）

会 場：MMC 4020 と Zoom

発表者（所属）：ウェルカー・ジェームズ（国際日本学部 国際文化交流学科）

司 会：シェラー・クインタナ（国際日本学部 国際文化交流学科）

演 題：Queer Transfigurations: Boys Love Media in Asia (Hybrid Book Launch)

第 2 回講演

開催日：2023 年 1 月 18 日（水）

会 場：MMC 4020

発表者（所属）：コウオジェイ・マグダレナ（東洋英和女学院大学 国際社会学部国際コミュニケーション学科）

司 会：シェラー・クインタナ（国際日本学部 国際文化交流学科）

演 題：Imperial Art Audiences

第1回研究会

開催日：2022年10月26日（水）

会 場：Zoom

発表者（所属）：知花愛実（経営学部 国際経営学科）

演 題：Re-claiming Farmscapes: Indigenous Resurgence in Commercial Farming in Okinawa

第2回研究会

開催日：2022年11月23日（水）

会 場：MMC 16023 と Zoom

発表者（所属）：ヘーブ・ステファン（国際日本学部 国際文化交流学科）

演 題：A “Civilization-based” Approach to Learning Western Languages for Japanese-speakers:
What Future for the “西欧言語を一括で学ぶ” -Project?

2. シンポジウムの開催

なし

3. 活動内容

2022年度は国際日本研究グループの1年目であった。活動を前期の途中から開始し、研究会・講演会を4回開催した。今年度は、会員二人が進行中の論文を発表し、フィードバックを得ることができた。来年度からは、前後期にそれぞれ3～4回集まる予定である。

（文責 ウェルカー・ジェームズ）

購入文献解題

『雑記帳』

編著者：松本竣介編

出版社：「雑記帳」復刻刊行委員会

出版年月：1977年6月

36歳で他界した洋画家・松本竣介（1912～1948）は、2022年にも企画展「生誕110年 松本竣介」（神奈川県立近代美術館 鎌倉別館、2022年4月29日～5月29日）が開催されたことによく示されているように、近年とみに注目が集まっている。中学時代に聴力を失った松本竣介だが、1929年、画家を志して上京し、太平洋画会研究所選科に通い、1935年、二科展に初入選を果たす。ただし、その後のキャリアは、日中戦争から太平洋戦争へと至る、苦難の時期に重なる。そうした歴史の渦中で、太平洋戦争開戦前夜の1941年4月、軍部による美術界への干渉に抗議して、松本竣介は美術雑誌『みづゑ』に「生きてゐる画家」（『みづゑ』437号）を発表した。これが、「抵抗の画家」という評言に代表される、今日の松本竣介評価の1つの鍵となっていることは間違いない。

松本竣介の文筆活動は、それ以前から、自身のアトリエ「綜合工房」を発行元とした随筆雑誌『雑記帳』において展開されていた。今回の購入資料は、『雑記帳（復刻版・全14冊）』（1936年10月～1937年12月）に、「主要目次・解題」が付されたものである。

この『雑記帳』には、松本竣介自身も多くの文章、デッサンを発表している。また、他の記事についても、単なる美術家によるエッセイにとどまらない。実に多くの書き手が文章や挿絵などを寄せており、個々のユニークな文章・イメージが誌面を飾った。また、特集されるテーマは、当時の中央論壇でトピックとなったものも多く、そうした際には、ふさわしい書き手が招かれていた。たとえば、創刊号には宮澤賢治「朝に就ての童話的構図（遺稿）」、特集には「日本的なもの、明日」（第2巻第2号）、「ヒューマニズムの動向」（第2巻第3号）などがあり、これらの編集やレイアウトなどは、すべて妻の禎子とともに松本竣介が手掛けていた。

（文責 松本和也）

『图像学与中国美术史研究』

編 者：刘伟冬

出版社：南京大学出版社

出版年：2020 年

本書は主に2つの部分によって構成される。1つは图像学研究の歴史概観、もう1つは图像学の視点による古代中国美術の分析である。图像学の歴史概観においては、おもにヨーロッパを中心に西洋の图像学研究の歴史的流れ、古典的图像研究とキリスト教とのかかわり、現代图像学の成り立ちと方法論などについて解説した。古代中国美術の分析においては主に漢代の壁画、彫刻を中心に、美術と仏教、道教などの宗教教義とのかかわり、图像や画面構成に含意されるシンボリックな要素などについて解説した。本書は、長らくイデオロギー的に制約された中国の美術史研究に新風を吹き込む役割を持っていると評することができよう。

(文責 彭国躍)

所 員 自 著 紹 介

1. 孫安石・大里浩秋（編著）『明治から昭和の中国人日本留学の諸相』

東方書店, 2022 年 3 月

本書は、明治、大正、昭和における中国人留学生の活動についての論考 15 編を収録している。1905 年を前後した一時期だけでも 5 万人を超える中国人留學生が日本に滞在していたと言われているが、これほど多くの中国人留學生が一つの国、または地域で学業に従事したことは極めて特異な事例であると言える。「第Ⅰ部 明治期の留学開始の諸相」に収めた 6 編は、いずれも明治期の、中国人留學生と日本との関係が開始される時期を取り扱っている。「第Ⅱ部 大正・昭和期の受け入れ側の諸相」の 4 編では、大正から昭和期にかけて中国人留學生を受け入れた日本側の各学会と教育機関などの諸相を取り上げている。「第Ⅲ部 日中戦争期と戦後の留學生の諸相」は、日中戦争期と戦後に至る時期の中国人留學生の活躍と戦争を挟んだ時期の歪みの諸相を取り上げる論文 5 編を収めている。以下、本書の具体的な構成を示す。

第Ⅰ部 明治期の留学開始の諸相

章宗祥編『日本遊学指南』を読む（孫安石）

清国留學生と『訳書彙編』の発行——創刊と財政、販売を中心に（郭夢垚）

寺尾亨の東斌学堂と留日學生——『向巖家書』を中心資料として（王鼎）

正則英語学校と清末の中国人留學生（川尻文彦）

清末期蚕業留日學生と中国蚕糸業会（東京）（王怡然）

清末の旗人留日學生——『大同報』を中心に（阿部由美子）

第Ⅱ部 大正・昭和期の受け入れ側の諸相

日華学会の中国における活動——北京駐在員高橋君平の事例を中心に（陳珂琳）

同仁会による留日医薬留學生の支援（見城悌治）

東京帝国大学の中国人留學生関係文書を読む（大里浩秋）

東京工業大学と戦前の中国人留學生（佐藤由利子・村松晶子）

第Ⅲ部 日中戦争期と戦後の留學生の諸相

中国人の日本留学と「日本研究」——団体と雑誌を中心に（高柳峻秀）

朱紹文研究員と戦時下の日本留学——高特設高等科と東大経済学部を中心に（田島俊雄）

モンゴル喇嘛僧の日本留学——真言宗と浄土宗を中心に（池田健雄）

中国留日同学会とその活動——『中国留日同学会 季刊』に見る（川島真）

中国留日同学総会の財務状況の考察（荒川雪）

2. 鈴木宏枝『アフリカン・アメリカン児童文学を読む——子どもの本という「励まし」』

青弓社, 2022年2月, 240頁

本書は、これまで積極的に扱われることの少なかったアフリカン・アメリカン児童文学について、その歴史と特質をまとめたものである。一般のアフリカン・アメリカン文学は、奴隷制や人種差別の過酷さに重心が置かれ、絶望や諦念が強調される。だが、児童文学は子ども読者を対象にすることで希望を語り、アフリカン・アメリカン文化に内包される「生きのびる力」をすくいあげて自己実現への「励まし」を描ける。また、そのメッセージは他の多様なマイノリティにも届きうる。

序章と「おわりに」を除く章立ては以下の通りである。

第1章 アメリカのなかの他者

第2章 アフリカン・アメリカン児童文学の輪郭

第3章 「ブラウニーズ・ブック」の意義

第4章 「わたしには夢がある」への応答

第5章 歴史の受容

第6章 ネットワークの形成

第7章 言葉の力

第1章で『アンクル・トムの小屋』の抄録版や演劇版の黒人像が示す文化的アイコンがアフリカン・アメリカンの子どもへの「励まし」にならないことを批判した上で、第2章で「励まし」となりうるテキストの萌芽と展開を概観した。第3章以下で、アフリカン・アメリカンの子どもが本の中にポジティブな自画像を見いだせるよう、ハーレム・ルネッサンス期の冊子「ブラウニーズ・ブック」や、公民権運動以降のテイラー、ハミルトン、マイヤーズらの作家が何を試みてきたかについて文化との関係を軸に詳細な作品分析をおこなった。

3. 中村隆文『組織マネジメントの社会哲学——ビジネスにおける合理性を問い直す——』

ナカニシヤ出版, 2022年3月, 202頁

「ビジネスにおいて哲学は不可欠だ」と昨今いわれるが、その場合の「哲学」というのは、経営者の理念であったり、あるいは、ブレインストーミング的な思考法を意味する場合が多い。しかし、それを社員が共有・実践するだけで仕事がうまくいったり、職場が働きやすくなることはほとんどないであろう。というのも、そこでは、自分たちがどういったものを欲し、どういったものを忌避しているのか、そして、周囲の同僚や顧客が何を求め、何を忌避しているのかということを知るような、いわば人間理解に欠けているからである。「哲学」の出発点が己を知ろうとすることである以上、人間理解をおろそかにすべきではない。人間があつまる会社・企業がうまく機能するためにもその理解に基づいた組織運営というものを考えてゆく必要があるだろう。

本書は、哲学思想に加え、認知心理学や行動経済学の知見を活かし、人間の行動・思考パターンや、倫理観の分析を行うものである。しかし、単なる学術的知見を羅列するのではなく、それをある一つの哲学的概念のもとに集約しながら、契約でもなく強制でもない、倫理的かつ営利的な感覚の共有のもとで「ともに働くこと」「ともに栄えること」への方策を打ち出してゆく。その鍵となるのが、「コンヴェンション convention」である。

4. 中村隆文『物語 スコットランドの歴史』

中央公論新社, 2022 年 5 月, 250 頁

イギリスといえば、おそらくは多くの人が、ロンドンを中心としたイングランド的なものを思い浮かべるであろう。とりわけ、日本の中等教育の西洋史では、イギリスの歴史＝イングランドの歴史として語られることが多い。しかし、同じブリテン島にありながら、イングランドとは異なる国家として（しかも先に王朝が成立した国家として）スコットランドは重要なポジションにあった。

スコットランドの王であるジェイムズ 6 世が 1603 年にイングランド王ジェイムズ 1 世になったこと、イングランド内戦や清教徒革命においてスコットランドが関与したこと、さらには、名誉革命やハノーヴァー朝成立以降、ジャコバイトと呼ばれるスコットランド人たちがイングランドまで攻め込んだことは、当時のブリテン島において大きな事件であった。そうした歴史の延長として、1999 年のスコットランド議会および自治政府の発足（復活）、そして、スコットランド国民党（SNP）からの首相選出、ひいては、2014 年の、イギリスからの独立を問うスコットランド住民投票が行われたのであって、現在のイギリスの政局や問題点を知るうえでも、スコットランドの歴史について学ぶことは重要な意義をもつものと思われる。

本書は、政治史だけでなく、教育や宗教、文学など、さまざまな角度から「スコットランド」を浮き彫りにすることで、それがイギリスにおいて独自の文化的アイデンティティを有したものであることを論じるものである。

5. 深沢徹『「この国のかたち」を求めて——リベラル・主権・言語——』

武蔵野書院, 2022 年 5 月, 217 頁

タイトルに謳った「この国のかたち」は、「はじめに」でも書いておいたように、司馬遼太郎の歴史エッセーを意識してのものである。

カバー表紙の帯封に、「ロシアによるウクライナ侵攻という事態が出来て、これはどうしても、いま「本」にしておかねばならないとのやむにやまれぬ思いにかられ、既発表のいくつかの文章を再構成するかたちで、急遽、本書を出版することとした」と記したように、歴史の歯車を逆回転させるかのような、ロシアによる今般の暴挙に応答すべく、近代国民国家としての日本の成り立ちを、あらためて振り返ることで、その行く末について思うところを述べた。

ついては、自由と民主主義に基づく近代国民国家にとって必須の成立要件と思われる、「リベラル」、「主権」、「言語」の三つの項目を掲げ、日本の在るべき姿を、過去の歴史に遡って概観しつつ、以下のような章立てのもと論を展開した。

【はじめに】 司馬の残したメッセージ

【リベラル】 第 1 章 二〇二〇年度後期「文学」シラバス

——丸山眞男の長編評論「忠誠と反逆」に導かれて、日本版「リベラル」の可能性を古典テキストのうちに探る——

【主 権】 第 2 章 「この国のかたち」を求めて（その一）

——「承久の乱」を通して見る「天皇」の位置づけ——

第 3 章 「この国のかたち」を求めて（その二）

——「大義名分論」の射程と「象徴天皇制」の行く末——

【言 語】 第 4 章 英語帝国主義の傘の下で

—— 水村美苗『私小説 from left to right』を手がかりとして——

第5章 平成版「横書のすゝめ」

—— 戦後「国語改革」の申し子の立場から ——

【「あとがき」に代えて】「この国」から遠く離れて

—— Exile (エグザイル)・Exsodus (エクソダス)・Diaspora (ディアスポラ) ——

6. 松本和也『太宰治の小説表現』

パブリック・ブレイン, 2022年11月, 112頁

本書は、太宰治の作品から、その小説表現のエッセンスが凝縮された「千代女」, 「カチカチ山」, 「女の決闘」, 「春の盗賊」の4作品をピックアップし、それぞれの小説表現における工夫や仕掛け-効果に注目することで、ていねいに読み解くことを目指したものである。「はじめに 読解へのアプローチ／太宰治の小説表現」では、太宰治の慣習的な読まれ方を批判的に再検討し、印象論的な作家論の陥穽を回避しながら小説表現それ自体を読む道筋を提示した。「第1章 小説をめぐる謎を書くということ——「千代女」では、かつて綴り方を書けた少女が、長じて「小説が書けないこと」を書くに至ったプロセスを読み解いた。「第2章 小説が語りかけるということ——「カチカチ山」では、小説表現における対読者戦略として指示詞(シフター)の機能について分析した。「第3章 小説の批評を小説として書くこと——「女の決闘」では、メタ・レベルの階層分析によって捉えられてきた小説表現の複雑さを、小説内作者の「書く」という行為に即して意味づけ直した。「第4章 「どろぼうに就いての物語」を語ること——「春の盗賊」では、複雑な作中作の様相を呈した「春の盗賊」全編が、その実、「小説の筋」のアイディアであることを論じた。最後に、展望として「おわりに 太宰治の小説表現／小説を読むということ」を付した。

7. 彭国躍著『都市空間の言語生態——上海の言語景観と道路命名の歴史——』

くろしお出版, 2023年2月, 220頁

本書は、上海という都市に現れる書記言語の生態の歴史を記述するものであり、言語学、社会学、歴史学、図像学と人類生態学などの多分野を跨ぐトランスディシプリナリー・アプローチを導入した研究の成果集成である。本書全体の内容は第Ⅰ部「上海言語景観史」と第Ⅱ部「上海道路命名史」の二部構成となっている。第Ⅰ部の言語景観史においては、19世紀末頃から百年にわたって上海の公共空間に現れた書記言語(店頭看板、商業広告、政治スローガン、道路標示など)の実態を記述し、その多言語使用の類型を抽出・分析した上で、開港、移・植民、戦争、革命と改革などによる中国社会の変化や政治体制の変更などの社会的生態環境がいかに都市の言語景観に影響を与えたかを明らかにした。第Ⅱ部の道路命名史においては、近代上海の道路名の形成と戦争との関わり、特にアヘン戦争、アロー戦争、日中戦争、国共内戦などの地政学的環境因子が路名変更に与えた影響と、社会主義制度に変わった後の文化大革命を含むたび重なる政治、経済の政策変動が路名の変化に与えた影響などを明らかにした。

本書は、言語学を中心とする超学際研究の先駆となり、歴史言語学、対照言語学や都市言語生態の研究に新しい知見を提供することになろう。

ニューズレター（第1号 2022年10月1日発行）

2022年度前期人文学研究所シンポジウム報告

「デザインミュージアムのヴィジョン」開催報告書 共同研究グループ「観光と美術」

開催日：2022年7月9日（土）13：30～17：00

会場：みなとみらいキャンパス米田吉盛記念講堂（オンライン
同時配信）

本シンポジウムは、デザイナー三宅一生の国立デザインミュージアム宣言から10年を経て、あらためてデザインミュージアムの現在と未来の可能性を考えることを趣旨とし、神奈川大学人文学研究所主催（共同研究グループ「観光と美術」企画）、デザイン史学研究会共同企画によりハイブリッド形式で開催された。

第1部では、日本にまだまだ存在しないデザインミュージアムについて、デザインやミュージアムに造詣が深い5名の登壇者がそれぞれの角度から論じ、その実現の道筋を、デザインミュージアム自体がもつ可能性とともに探った。

深川雅文氏（インディペンデント・キュレーター／クリティック）は「デザインミュージアムのヴィジョン」をテーマに、ニューヨーク近代美術館における過去の重要なデザイン展を取り上げながら、プロダクトと展示の関係を紐解いた。人間の生のかたちとしてのデザインの表現性という観点から、デザインをミュージアムで展示することの重要性が指摘された。

花井久穂氏（東京国立近代美術館主任研究員）は、自身が共同企画した「民藝の100年」展（東京国立近代美術館、2021年10月～2022年2月）の成果に基づき、「民藝運動とミュージアムの思想」をテーマに発表した。流動的かつ多面的な柳宗悦らによる運動のダイナミズムは、建物外へも拡張するデザインミュージアムの可能性を想起させるものであった。

太刀川英輔氏（JIDA 理事長／NOSIGNER 代表）は「デザインミュージアムの可能性」と題し、独自のデザイン理論である「進化思考」を軸に、デザインの本質とそのコレクションの創造的意義について発表した。デザインの進化を表した系統樹は、人々の願望、社会の文化、技術革新の歴史を浮き彫りにするものであり、ミュージアムの実践に関わる手法として注目された。

横山いくこ氏（リード・キュレーター M+ 香港）は「M+ 香港：デザイン&建築コレクション形成の10年」をテーマに、アジア最先端の美術館として世界的な注目を集める M+ 美術館のコレクション形成と開館の経緯を、豊富なデータとともに詳細に報告した。行政や市民との関係、ヴィジュアルカルチャーをキーワードとするコレクションの独自性、さらに、領域横断だけではなく地域の共通性を探求する美術館の展望が紹介された。

暮沢剛巳氏（東京工科大学）は「ICOM 職業倫理規定と日本のデザインミュージアム」と題し、



ICOM（国際博物館会議）による博物館の新定義案を分析し、博物館の「役割」に加え「使命」を規定する新定義とデザインミュージアムの関係を論じた。問題解決というデザインが本来もつ役割に加わる使命の可能性が、国内外の事例とともに検討された。

第2部では、登壇者たちによるパネルディスカッションが行われ、デザインミュージアム設立に向けた課題をめぐり、踏み込んだ議論が展開された。フロアや zoom からも積極的な質問や意見表明が相次ぎ、具体的行動の必要性、研究者とミュージアム関係者の連携の重要性等を確認して閉会の運びとなった。

ハイブリッド形式の開催により、シンポジウムの国際性（横山氏は香港からオンライン登壇した）とシンポジウムへのアクセシビリティが飛躍的に向上し、非常に有意義なシンポジウムになったと考える。会場参加者数は30名、オンライン参加者数は46名（申込数）であり、本学教員・学生のほか、研究者、デザイン関係者、美術館関係者、独立行政法人勤務者等の幅広い参加があった。本シンポジウムが、デザインミュージアムの新たなヴィジョンを切り拓き、また、この問題に関心をもつ人々をつなぐ場となったことを願う。ご支援いただいた人文学研究所に深く感謝申し上げます。

企画・司会 角山朋子（国際日本学部国際文化交流学科准教授）



講演会報告 (1)

信岡朝子氏講演会「狩猟と男性性——北米におけるホワイト・ハンター神話と「存在の大いなる連鎖」」共同研究グループ「＜身体＞とジェンダー」

開催日：2022年8月5日（金）

会場：神奈川大学みなとみらいキャンパス
17017 室（オンライン同時配信）

最初に世紀転換期アメリカのセオドア・ローズベルト大統領と熊狩りという、テディベアの起源となったエピソードの内実やイメージの転換が紹介された後、大統領の伝記などに出てくる博物学者や自然保護主義者という人物像が、同時代（金ぴか時代から進歩の時代へ）の思想とのかかわりで分析された。病弱であった幼年期、「女々しい」とも揶揄された過去と、それゆえの男性性の発露の関係が示された後、二つの男性性、manliness と masculinity という概念装置での分析が試みられた。manliness が自制心や抑制を基調とし、弱き存在を守るといった、ある種貴族主義的な姿勢であるのに対して、masculinity は身体的・性的側面が強い男性性で、攻撃的であったり、非白人種や下層階級が持つとされた野蛮さを白人男性が取り込んでいったものであった。前者から後者への移行、さらには両者の関係性を見る必要が指摘された。

そこには文明が過度に進み衰退した白人種が力を取り戻すという歴史観が見られるが、その背景として、ダーウィンの進化論も飲み込むような「存在の大いなる連鎖」という思想があった。そうした視点に沿って、狩猟といった野外活動を重視し、対外的には帝国主義的拡張を進めたシンボルとして、ローズベルト大統領は位置づけられるとまとめられた。また、manliness から masculinity への移行によって、上位人種の「野蛮化」という矛盾が現れるが、それを解消するものとして白人においては男女差が強調され、男性が女性を庇護・管理するように、人間は動物を庇護・管理するという並行関係が強調された。「弱きを助け強きを挫く」といった価値観は、大統領が設立した Boone and Crockett Club に見られるものであり、自然保護と人種主義的エリートイズム、家父長制的価値観の接合を、同時代思潮との関連で読み解いていくことの意義が論じられた。

講演を受け、アメリカという国の歴史と狩猟のかかわりや、女性ハンターの問題、また現代の動物保護思想や大統領との時代を越えたつながりについて議論を行った。

司会 熊谷謙介（国際日本学部国際文化交流学科教授）



講演会報告 (2)

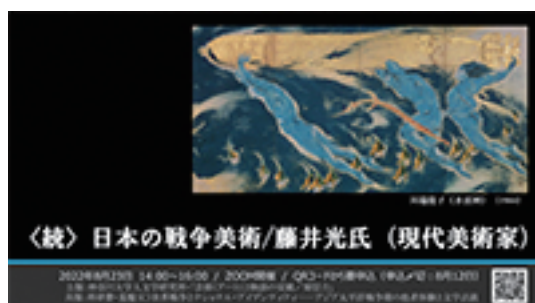
「〈続〉日本の戦争美術」 国際日本学部教授 松本和也

開催日：2022年8月23日（火）

会場：Zoom

「芸術（アート）と物語の交雑／発信力」班では、科研費「世界戦争とナショナル・アイデンティティ——アジア太平洋戦争期の他者体験と文学言説」研究会との共催で、「Tokyo Contemporary Art Award (TCAA) 2020-2022 受賞記念展」（東京都現代美術館、2022年3月19日～6月19日）を終えた現代美術家の藤井光氏をお招きして、「〈続〉日本の戦争美術」と題してご講演頂いた。

日本の帝国主義や植民地主義をリサーチした作品を多くつくってきた経験と、ポリティカルなテーマを制作するアーティストの置かれた厳しい環境を語ることで戦争画を扱うことの意味を共有するところから始まった講演において、藤井氏は美術史家による「戦争画」の捉え方を紹介して時系列的な意義を整理した上で、それが同時に、日本における美術の位置を集約的に象徴したものであることを示した。こうした前提を共有した上で、藤井氏は先の展示に即したリサーチや展示について、貴重な作品映像なども交えて自作改題を展開した。藤井氏は、リサーチしたアメリカ国立公文書館を踏まえ、戦後、戦争画を「プロパガンダか芸術」か捉えかねた占領軍の側から「戦争画」を捉えた映像インスタレーション《日本の戦争美術》を制作したこと、さらに、廃材を用いた原寸大の戦争画153点を制作・配列し、当の戦争画のキャプションを付した《日本の戦争画》を展示したことを紹介し、「見えない」戦争画を「見える」かたちに作品化したこと、それらのねらいを語った。最後に藤井氏は、展示終了後に入手したという、占領軍の「戦争画」理解に関わる資料を紹介しつつ、「戦争画」が今なお、日本国内／外の戦争に関わる問いを発し続けていることが語られた。



調査研究報告

6 月調査研究報告

国際日本学部教授 尹 亭仁

6月3日（金）～5日（日）の2泊3日、沖縄に出張した。那覇空港をはじめ、那覇市役所や沖縄県庁周辺、沖縄県立博物館・美術館、首里城公園、国際通りなどでの多言語表示を調べるのが目的であった。

初日は那覇空港とモノレール駅を中心に調査を行なった。那覇空港はもちろんのこと、那覇空港からの重要な移動手段であるモノレールの車両の中は5言語（日本語・英語・簡体字中国語・繁体字中国語・韓国語）表示が徹底していた（図1）。

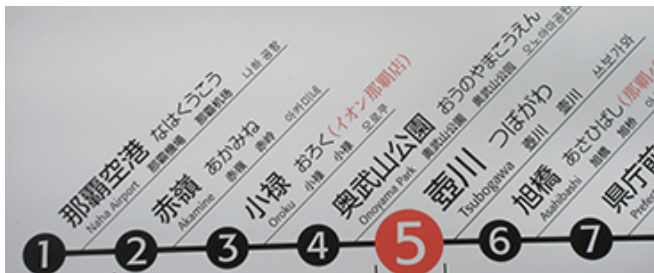


図1 モノレールの中の多言語表示



図2 沖縄県立博物館・美術館

2日目は、期待を寄せながら沖縄県立博物館・美術館を訪れたが、多言語表示は「お手を触れないでください」の1か所のみで、日本語と英語の表記しかなかった（図2）。長崎の原爆資料館の場合、4言語表示が整っており、訪れた外国人、特に近隣の中国人や韓国人はそれぞれの母語で当時の悲惨さを理解することができたと思われる。日本語や英語だけだと情報処理にどうしても時間がかかるため、多くの人は見入って読むことができない。沖縄の文化に対する誇りや伝えたいメッセージを多言語表示をすることで、より効果がもたらせられると思われる。午後は沖縄県庁および市役所周辺での多言語表示を調査した。街中の案内図は4言語、または5言語表示であった。

3日目は「国際通り」と首里城周辺の言語景観を調べた。国際通りには多言語表示が多少見られたが（図3）、首里城では主に2言語表示であった。沖縄の観光を活性化するためには言語景観の改善と整備の余地があると思う。那覇空港の5言語表示では簡体字の中国語より繁体字の中国語が先であった（図4）。これは中国より台湾の人が多く訪れることの証拠であり、「近隣性」重視の表れだと考えられる。



図3 国際通り



図4 那覇空港の多言語表示

今回の調査で、日本の言語景観、とりわけ公共表示においては、北海道から沖縄まで、多言語表示が整備されていると言えそうである。また、他の地域と違って沖縄では簡体字の中国語より繁体字の中国語が先に表示される傾向が見られた。

ニューズレター（第2号 2023年3月1日発行）

2022年度後期人文学研究所シンポジウム報告

「Literature Goes to School

教室の中の文学——明治・大正期を中心に」開催報告書
共同研究グループ「おとぎ話文化研究」

開催日：2022年9月3日（土）14：00～16：30

会場：神奈川大学みなとみらいキャンパス 米田吉盛記念
ホール（オンライン併用）

本シンポジウムは、本共同研究グループのメンバーである外国語学部英語英文学科教授の鈴木宏枝氏と村井が、本学外国語学部の海外招聘研究者であるカナダのサイモン・フレイザー大学准教授のメレック・オータバシ氏の協力のもとで企画し、人文学研究所の主催により開催した。4人のパネリストが登壇し、明治・大正期の学校教育に文学がどのように取り入れられ、受け止められたのかを、世界文学、児童文学、教育学、図書館学など複数の視点から多角的に検討するとともに、教科書だけでなくそれ以外の図書、雑誌、口頭による語りを含む、子どもを対象とした複数のメディアを射程に入れて考察した。「教室の中の文学」という、現在議論の的となっている国語教育における文学の扱いの問題にもつながる重要なテーマを、近代の学校教育の始まりに立ち返り、世界とのつながりの中で捉え直す、初の試みといえる。講演は以下のとおりである。

1. 「教材としての文学——明治と大正の教育者が欧米に学んだこと」
メレック・オータバシ（サイモン・フレイザー大学准教授、神奈川大学海外招聘研究者）
2. 「博文館『少年文学』叢書の受容：『二重の顧客』にむけての戦略」
柿本真代（京都華頂大学現代家政学部准教授）
3. 「戦前期口演童話について——叢書『実演お話集』を手がかりに」
宮路大朗（早稲田大学大学院教育学研究科修士課程）
4. 「日本児童図書館の黎明期」
加藤節子（東京子ども図書館司書）

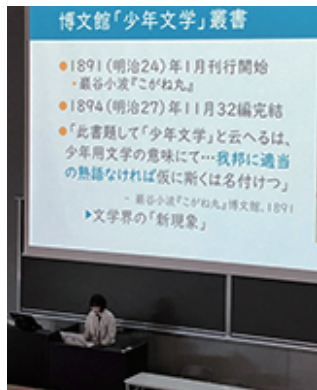
講演後のラウンドテーブル・ディスカッションには、講演者4名に加え、鈴木氏がディスカッサントとして参加し、村井が司会を務めた。ディスカッションでは4つの講演の中で提起された異なる分野からの論点を相互に関連づけることで、このテーマを今後さまざまな分野の研究者が国際的な視点から領



域横断的に探求していくための道筋が示された。聴衆からの質問や提言も複数あり、終了時間を延長しての活発な議論の場となった。

オンラインを併用した形式により、本テーマに関心を寄せる国内外の方々に広く参加いただける有意義なシンポジウムとなった。会場参加者は29名、オンライン参加者は30名（申込数）であり、本学教員・学生のほか、児童文学や教育学の研究者、学生、図書館司書、翻訳家、作家等、幅広い分野からの参加があった。ご支援いただいた人文学研究所のみなさまに深く感謝申し上げます。

司会 村井まや子（外国語学部英語英文学科教授）



講演会報告 (1)

胡穎氏（神奈川大学，非常勤）「清末の五校特約成立過程の再検討」 共同研究グループ「日中関係史」

開催日：2022 年 12 月 3 日（土）

会 場：神奈川大学 MM キャンパス・200032 室
（オンライン配信）

胡穎氏の報告は、(1) 20 世紀の初頭に始まった日本の一高における清国留学生の受け入れの費用（教育費と寄宿舎の創設費など）を清国側が負担していたことを指摘し、(2) 明治時代の官立学校の管轄機関である文部省が、この受入の過程に如何に動いたのかを明らかにし、(3) 後に五校特約が成立する過程でこの一高の委託教育というモデルが踏襲された可能性を指摘する内容であった。

この分析に使用された主な資料は、外務省外交史料館の留学生関係資料、東京大学文書館所蔵の文部省往復文書、そして、東京大学所蔵の狩野亨吉文書であった。とくに、狩野亨吉文書は、狩野が東京大学教養学部的前身である一高の校長を務めた 1898 年から 1906 年までの時期の文書を中心としたもので、一高の学業や寄宿舎のことはもちろん清国留学生の受け入れに関連する文書などが含まれており、今後さらなる資料検討が必要である。



講演会報告 (2)

小澤裕之氏講演会「マルシャーク『森は生きている』について」 共同研究グループ「各国近代文学の研究」

開催日：2022 年 12 月 26 日（月）

会 場：Zoom

講演者の小澤裕之氏は、ロシア文学の研究者で、すでに研究書として『理知のむこう ダニイル・ハルムスの手法と詩学』（未知谷，2019）を刊行しているほか、やはりダニイル・ハルムスの『言語機械 ハルムス選集』（未知谷，2019）を翻訳している。

今回の講演会は、小澤裕之氏が翻訳したサムイル・マルシャーク『森は生きている～12の月のおとぎ話～』が収められた『小学館世界J文学館』（小学館，2022）の刊行を記念して企画された。

講演では、マルシャーク『森は生きている』を軸としながらも、作家紹介からスタートし、「1. 『森は生きている』について」では、『森は生きている』の成立について、もともとなった昔話や散文『12の

月』などの紹介・解説があった。また、スラブの昔話について、その広がりも紹介され、それらを「昔話の話型」として整理・分析し、表と併せて提示された。

「2. 翻訳について」では、翻訳上の課題（の1つ）であった、「まま娘は姉か妹か（ロシア語では同一の単語）」をどのように解決したかについて、「姉／妹」と捉えた場合のプロットを分析し、昔話一般に関わる知見（三浦佑之）も参照しながら、「妹」と解釈することにした根拠を説得的に述べられた。最後に、参加者からの質疑があり、個別の論点について知見が深められた。

講演会報告（3）

マグダレナ・コウオジェイ氏講演会「Imperial Art Audiences」 共同研究グループ「国際日本研究」

開催日：2023年1月18日（水）

会 場：神奈川大学みなとみらいキャンパス 4020 室

コウオジェイ氏のテーマは「Imperial Art Audiences」である。講演では、およそ1920年代から1940年代初頭までの、植民地時代の韓国と台湾の新聞における近代美術の宣伝、両植民地における日本美術のアートマーケット、そして展覧会の来場者の反応を中心に論じられた。コウオジェイ氏は、日本と植民地時代の韓国・台湾の相互に関連した芸術界の関係を調査しており、本講演で自身の研究の焦点について紹介した。

当時、政府の主催する美術の公募展覧会（東京と植民地の両方）は、二つの特別な点があった。一つ目は近代美術の展示、二つ目は近代美術や美術館について人を教育するための重要な場となったことである。コウオジェイ氏の研究によると、植民地での美術展は大日本帝国の支援を受けて開催され、来場者に「大日本帝国」のイメージを定着させる狙いがあった。韓国や台湾のアーティストらの作品は、その地に定住していた日本のアーティストらの作品と共に展示された。美術展を通じて、韓国と台湾は「日本」の一部だという印象を与えた。この展覧会は、当時の大日本帝国を理解する上でも、重要なできごとであった。これらの点についての講演がなされ、質疑応答では、美術品の受容や現地の帝国理解について議論が行われた。

コウオジェイ氏の研究は、近代日本美術と帝国主義の影響に対する理解を深めることを目的としている。帝国の芸術界を検証することによって、国家的な美術の研究に焦点を当てた美術史研究の欠点を示した。日本近代美術の発展を深く理解するため、日本美術研究に植民地の美術を含めて検討することが必要であるとの主張がなされた。

調査研究報告 (1)

10 月調査研究報告

国際日本学部准教授 平山 昇

2022 年 10 月 2 日に熊本大学において久しぶりの対面形式でおこなわれた日本民俗学会第 74 回年会において、研究報告「都市祭礼の近代史」をおこなった。本報告は、グループ発表「都市祭礼の近現代——松ばやしからどんたくへ」（座長 後藤晴子）の一部として行ったものである。

本報告では、近代日本の都市祭礼の変容過程について、博多松囃子を事例として検討した。現在の博多松囃子は博多どんたく開催中の 5 月 3～4 日に福博（福岡・博多）のまちを練り歩く形となっており、三福神（福神流、恵比須流、大黒流）と稚児流（東流、西流）から成る。本報告では、博多松囃子の近代史を新聞資料などを活用して明らかにすることで、一見すると古式ゆかしい「伝統」に見える博多松囃子が、実は軍隊（陸軍）、メディア、商工業界、皇室ナショナリズムといった近代の諸要素と絡みながら劇的に変容してきたことがみえてきた。

この報告をふまえ、近代以外の時代の博多松囃子について報告した同じグループの他の報告者たち、フロアの参加者たちと活発な議論を行い、博多のみならず近現代における都市祭礼について考察するための手がかりを種々得ることができた。



調査研究報告 (2)

11 月調査研究報告

国際日本学部教授 松本和也

昭和戦前期，特に大政翼賛会文化部が主導した地方文化論を軸として，「日本文化」のエッセンスが宿る「古層」としての地方の再発見 - 再評価から，本土空襲の危機に瀕しての疎開の意味づけまで，それはすぐれて言説的な出来事（の推移）であった。昭和 15 年，沖縄を再発見しながらも，「沖縄方言論争」をへて次第に距離をとるようになった柳宗悦が次に眼を向けたのは「東北」であった。あれから，80 年以上の時を経て，東北の現在はいかなる変化を遂げたのか。

そうした視線の痕跡は，今なお残っているように思われるが，今や東北の最北端の青森県は，美術館のメッカであり，特に日本で現代美術を鑑賞するには外せないエリアとなっている。今回の調査では，こうした昭和戦前期／現在における「地方」の意味を考えながら，青森県の代表的美術館のうち 3 館を移動しながら鑑賞し，その文化的意義について検討した。

旧吉井酒造煉瓦倉庫を田根剛の設計によって再創出した弘前れんが倉庫美術館では，「[「もしもし，奈良さんの展覧会はできませんか？」奈良美智展弘前 2002-2006 ドキュメント展]」が開催されており，メタ展覧会として地域で作りに上げた展覧会のアーカイブ展示がなされていた。

2021 年にリニューアルオープンした八戸市美術館では「佐藤時啓——八戸マジックランタン——」が開催されており，街の記憶を風景に重ねたサイト／タイムスペシフィックな写真が展示された。

十和田市現代美術館では，「名和晃平 生成する表皮」を閲覧し，「表皮」をモチーフとした文字通り世界レベルの現代美術をコンセプト／造形の双方から鑑賞することができた。

いずれも，「地方／歴史」を美術を介して現代に接続する有意義な鑑賞体験であった。



弘前れんが倉庫美術館



八戸市美術館



十和田市美術館

調査研究報告 (3)

12 月調査研究報告

国際日本学部准教授 山口太郎

2022 年 12 月 26 日～28 日にかけて、長崎市において都市景観に関する調査を実施した。

1. 斜面住宅地である東山手・南山手地区をはじめとする定点観測地点での景観観察 (27 日実施)
2. 長崎市立図書館での「長崎国際文化都市建設法」に関する新聞記事の検索 (26・28 日実施)

1. について、世界遺産に登録されているグラバー園や大浦天主堂がある南山手地区には、商業空間が広がっている。コロナ前に営業していた店舗のうち、グラバー園の入口より先にある複数の店舗でシャッターや看板が下ろされた状態であった。

長崎は夜景が有名であり、代表的な眺望地点は稲佐山から長崎港をはさんで山手や出島のある地域を眺めるものである。これは遠景となる。それに対し、昼間に観光客が多く訪れるグラバー園からは、小河川の大浦川の対岸に位置する東山手地区の教育施設群や住宅群を眺めることができる。これは中景となる。グラバー園の近くに位置する洋館である南山手レストハウスから中景となる東山手地区の景観を 10 年以上観察してきたが、この数年で東山手地区の住宅の数が減ってきている。その一因に、上へ上へと階段が延びていたこの地区に尾根道につながる幅の広い道路が整備されたことがある。居住者の交通利便性が高まったと同時に、南山手からの眺望景観に変化が生じたことになる。

また、いわゆる「まちなか」の平地では、高層の集合住宅やホテルの建設が目立った。現在長崎市では「立地適正化計画」に基づき、斜面住宅地から「まちなか」への居住地移動の推進が図られている。斜面住宅地である東山手の住宅が減り、平地である「まちなか」の集合住宅の増加という土地利用上の変化が、そのまま居住者の移動とは限らない。これを知るためには、例えば新規集合住宅居住者に前住地を聞くアンケートの実施などが必要となろう。

2. について、今回調査したのは「長崎国際文化都市建設法」が国会で可決された 1949 年 5 月から 7 月の市民投票を経て、8 月 9 日の公布までの期間である。「長崎日日新聞」5 月 12 日付では、本法案が広島で出された「平和都市建設法案」に対し、「乗遅れないために陳情したもので、長崎の市の方は法案も出ていなかった」「法案は平和都市を二つ作ることは出来ないため文化都市の名で平和都市法案に準ずることになった」といった法案名の背景を知ることができた。詳細は、今後分析していく。



南山手レストハウスを視点場とした東山手地区の景観 (2022 年 12 月 26 日, 山口撮影)

神奈川大学 人文学研究所

The Institute for Humanities Research

Kanagawa University



◆人文学研究所の事業

人文学研究所は1963年、人文学研究領域相互の活発な研究活動を支援することを目的に神奈川大学の附属研究所として設立されました。

人文学研究所の主な活動は

- ① 人文学に関する研究及び調査
- ② 研究資料の収集及び整理
- ③ シンポジウムや講演会開催
- ④ 研究及び調査成果の発表のための刊行物の発行

などを中心としています。具体的には、人文学系の各種テーマによる共同研究グループの共同研究を大きな柱に様々なシンポジウム・講演会を開催し、また、『神奈川大学人文学研究叢書』を発行するなど多彩な活動を行っています。

◆人文学研究所の研究活動

人文学研究所の活動は、共同研究グループによる調査・研究活動と、国外研究機関との学術交流やシンポジウムの開催の二つに分けることができます。本研究所設立以来、活動を展開した共同研究グループは総数30グループ以上を数えます。

【人文学研究所共同研究グループ一覧】

(2023.3)

No.	名 称	研究テーマ
1	日中関係史	近代以降現在までの日中関係の諸問題
2	言語変異研究	中国語の語彙近代化問題
3	〈身体〉とジェンダー	近代以降、大きく転換した身体表象の変容と、その文化的・社会的メカニズムとの関わりについて、なかでもジェンダーという視点に注目しながら、地域や時代を横断し、多様なテキストをもとに考察する。
4	自然観の東西比較	風土を基礎にした神と自然についての歴史的、思想史的な比較研究
5	ヒト身体の文化的起源	人間の身体を系統的に遡り、その根源を考察することで、身体が持つ機能的な意義を検討する。
6	日中韓対照言語研究	日中韓三言語におけるヴォイス・テンス・アスペクト・モダリティの対照研究
7	各国近代文学の研究	1. 各国の近代文学の対象・方法・成果を比較・検討する 2. 各国の近代文学（研究）の社会的・歴史的配置を研究する 3. 「新しい文学研究」の方法論・実践を模索する
8	知覚認知システムの普遍性と多様性	人の知覚・認知の仕組みについて、研究することを目指しており、特に、知覚の様相や認知的様相に共通な普遍性とそれらの様相の相互効果によって展開した多様性を現象・行動観察や計算論的解析などを通して明らかにする。
9	学びの見える化	専門職等の人材育成の見える化を行い、教育・学習のあり方や体系化を検討する。
10	臨床心理学研究グループ	臨床心理学に関する包括的研究
11	芸術（アート）と物語の交雑／発信力	広義の芸術（アート）について、物語との交雑を視野に入れて、調査・研究を行う。
12	おとぎ話文化研究	おとぎ話とそのアダプテーションについて、特に「おとぎ話と多種共生」の問題を中心に、文化、時代、メディアを横断する視点から研究する。
13	神奈川の地域と文化	横浜をはじめとする神奈川県内のさまざまな地域の文化・歴史・民俗・地理・観光の諸相について、本学に集う様々な領域（観光学、考古学、地理学、民俗学、歴史学など）の研究者たちが集い、それぞれの強みを活かしつつ他の領域の手法からも刺激を受けながら、学際的に探究していく。
14	観光と美術	美術とは、人間が社会を築き、それぞれの歴史、宗教、生活、自然環境から生み出された表現である。最近では地域の歴史遺産や伝統工芸は重要な観光資源としてにわかに注目されてきているが、その活動は一過性のものが多い。本研究グループは、美術（特にフェイナート）や工芸デザインの分野に特化し、観光における功罪を再認識し、その正負の効果を体系化する。美術・工芸デザインの真の美的価値を評価できるアート・リテラシーを向上させることで、観光での活用を持続可能なものにすることが目的である。

15	言語景観と多文化共生	観光立国日本の多言語表示と情報発信を再考する
16	国際日本研究	日本文化（社会や歴史、文学、美術、宗教、メディア等を含む）を国際的な視野で、学際的かつ総合的に研究すること

※活動休止中「越境する比較文化」「NCH 新聞研究会」

◆人文学研究所・2022 年度・講演会

敬省略

No.	日時	講演者	テーマ	所属（職業）
1	8 月 5 日（金）	信岡朝子	「狩猟と男性性——北米におけるホワイト・ハンター神話と「存在の大きい連鎖」」	東洋大学文学部
2	8 月 23 日（火）	藤井光	〈続〉日本の戦争美術	現代美術家
3	12 月 3 日（土）	胡 穎	「清末の五校特約成立過程の再検討」	神奈川大学非常勤講師
4	12 月 26 日（月）	小澤裕之	マルシャーク『森は生きている』について	早稲田大学
5	1 月 18 日（水）	マグダレナ・ゴウオジェイ	韓国と台湾の植民地新聞に掲載された日本美術、植民地における日本美術のアートマーケット、そして公式美術サロンの来場者	東洋英和女学院大学国際社会学部
6	2 月 4 日（土）	櫻井良樹	「宇都宮太郎関係文書の中国人陸軍留学生関係資料について」	麗澤大学

◆学術交流とシンポジウムの開催（主催・共催を含む）2016 年～2022 年

- ◇国際シンポジウム「中国古典小説研究 30 年の回顧と展望」(Studies on Chinese Classic Novels Retrospect for 30 Years and Prospect for the Future) 2016 年
- ◇「ホスピタリティと人文学の役割——足元からの多文化共生——」
 - 【第一部】公開シンポジウム 【第二部】公開講演会 2016 年
- ◇国際シンポジウム「クィアな変容・変貌・変化（トランスフィギュレーション）：アジアにおけるボーイズラブ（BL）メディア」(Queer Transfigurations: International Symposium on Boys Love Media in Asia) 2017 年
- ◇国際シンポジウム「デザインミュージアムのヴィジョン」2022 年
- ◇国際シンポジウム「Literature Goes to School」2022 年

◆人文学研究所の出版物

人文学研究所は研究所の諸活動によって得られた成果を社会に還元するために『人文学研究所報』を年に 2 回発行しています（2022 年度 第 68・69 号）。国外研究機関との学術交流の成果としては、浙江大学日本文化研究所との共編で『中日文化論集』（1991～1999, 中国語）を発行してきました。さらに、共同研究グループの研究成果をまとめた学術書シリーズ『神奈川大学人文学研究叢書』を刊行しています。

人文学研究所共同研究グループ一覧

2022 年度

No.	名 称	研究テーマ	活 動 計 画	代表者	メンバー	人数	叢書
1	日中関係史	近代以降現在までの日中関係の諸問題	1. メンバー各自の関心に基づく研究会の開催 2. 学外研究者の講演、研究交流 3. 日中相互の留学生に関する調査研究 4. 在日華僑に関する調査研究 5. 中国と東アジアにおける旧日本租界・居留地に関する調査研究	孫 安石	孫 安石・松本安生・村井寛志・柳澤和也 〔名誉〕大里浩秋・鈴木陽一 〔元教〕吉川良和 〔学外〕内山 籐・川島 真・川尻文彦・中村みどり・劉 建雲・荒川 雪・周 一川・見城悌治・李 慶美	16	2022 年度は無
2	言語変異研究	中国語の語彙近代化問題	1. 中国語の言語近代化に関するデータ収集と資料調査 2. 近代中国語の外来語と和製漢語借用に関する資料調査 3. 「国語」という中国語の成立に関する資料調査 4. 言語景観と中国語近代化の関連に関する資料調査	彭 国躍	彭 国躍・加藤宏紀・夏 海燕 〔非〕楊 洲	4	2022 年度は無
3	〈身体〉とジェンダー	近代以降、大きく転換した身体表象の変容と、その文化的・社会的メカニズムとの関わりについて、なかでもジェンダーという視点に注目しながら、地域や時代を横断し、多様なテキストをもとに考察する。	2020 年に発行した叢書『男性性を可視化する』の反省をもとにしつつ、2020 年度から「種」や「動物」とジェンダーの関わりをテーマにした叢書の出版を目指して、学内・学外から多くの新メンバーを集め研究会を組織している。2022 年度も研究発表を重ねていき、叢書計画の輪郭を整える予定である。	熊谷謙介	熊谷謙介・村井まや子・クリスチャン ラットクリフ・鈴木宏枝・秋山珠子・笠間千浪・角山朋子 〔名誉〕山口ヨシ子 〔非〕岡部杏子・古屋耕平 〔学外〕菅沼勝彦・江崎聡子・小松原由理・中村みどり・田中里奈	15	検討中 2023 年度予定
4	自然観の東西比較	風土を基礎にした神と自然についての歴史的、思想史的な比較研究	1. 研究テーマに関する調査・研究・資料蒐集 2. メンバーを中心とした研究会の開催 3. 外部の研究者による講演会の開催	上原雅文	上原雅文・小熊 誠・坪井雅史・前田禎彦・村井まや子・山本信太郎・大川真由子・中村隆文・ブライアン ルバート・角南聡一郎・矢崎佐和子 〔名誉〕伊坂青司・鳥越輝昭	13	2022 年度は無
5	ヒト身体の文化的起源	人間の身体を系統的に遡り、その根源を考察することで、身体が持つ機能的な意義を検討する。	1. 研究テーマに関連した講演会を年 4 回程度実施する。 2. 研究テーマに関連した調査を行う。	衣笠竜太	衣笠竜太・笹川 俊・北岡 祐 〔非〕八重嶋克俊・中島孝寛・山崎由紀奈	6	2022 年度は無
6	日中韓対照言語研究	日中韓三言語におけるヴォイス・テンス・アスペクト・モダリティの対照研究	1. メンバーによる研究発表 2. 研究関係者による講演会の開催 3. 論文の投稿・外部学会での発表の支援	尹 亭仁	尹 亭仁・佐藤裕美・高木南欧子・鈴木慶夏・山田昌裕・佐藤 梓・由川美音 〔非〕稲毛 恵・李 貞旼	9	2022 年度は無
7	各国近代文学の研究	1. 各国の近代文学の対象・方法・成果を比較・検討する 2. 各国の近代文学（研究）の社会的・歴史的配置を研究する 3. 「新しい文学研究」の方法論・実践を模索する	1. 研究テーマに即した調査、研究の実施 2. 各メンバーの関心に基づく研究会の開催 3. 学外研究者の講演、研究交流	松本和也	松本和也・熊谷謙介・水川敬章 〔非〕岡部杏子・古屋耕平 〔学外〕中村みどり・吉田遼人・アシアヘアモ マスエル エルネスト	8	検討中 2023 年度予定
8	知覚認知システムの普遍性と多様性	人の知覚・認知の仕組みについて、研究することを目標としており、特に、知覚の様相や認知的様相に共通な普遍性とそれらの様相の相互効果によって展開した多様性を現象・行動観察や計算論的解析などを通して明らかにする。	・共同研究遂行 ・公開講演会開催（随時） ・研究報告会開催（2023 年 2 月）	吉澤達也	吉澤達也・前原吾朗・松永理恵・麻生典子	4	2022 年度

9	学びの見える化	専門職等の人材育成の見える化を行い、教育・学習のあり方や体系化を検討する。	研究テーマの内容に基づき、各々テーマから専門職の人材育成の見える化を目指す。2022年度は、報告書作成及び出版化に向けて、研究成果を公開する。 研究会の実施方法としては、 ○研究会を月1回ペースで zoom にて実施する。 ○講演会を1回行う。 研究メンバーは、下記の登録者以外に学内と学外とで、内容に応じてメンバーを募って実施する。	齊藤ゆか	齊藤ゆか・太田早織 〔非〕長浜洋二 〔学外〕森 和夫・西村美東士・安藤めぐみ・大瀬恵子・久米篤恵・菅沢 茂	9	2022 年度
10	臨床心理学研究グループ	臨床心理学に関する包括的研究	国家資格公認心理師の課題と展望の包括的研究 ・国家資格保有者の分類、属性、就業状況などの職能的な情報の収集 ・厚生労働省の公認心理師関連の政策や施策についての情報収集 ・職域の拡大や変化についての情報収集	杉山 崇	杉山 崇・瀬戸正弘・山蔦圭輔・麻生典子・森田麻登	5	2022 年度は無
11	芸術（アート）と物語の交雑／発信力	広義の芸術（アート）について、物語との交雑を視野に入れて、調査・研究を行う。	1. 研究テーマに即した調査・研究の実施 2. 各メンバーの関心に基づく研究会の開催 3. 学外研究者の講演、研究交流	松本和也	松本和也・藤澤 茜・水川敬章	3	2022 年度は無
12	おとぎ話文化研究	おとぎ話とそのアダプテーションについて、特に「おとぎ話と多種共生」の問題を中心に、文化、時代、メディアを横断する視点から研究する。	1. 研究テーマに関する資料収集と調査を行う。 2. 研究テーマに関する研究会、講演会、展覧会等を実施する。 3. 研究テーマに関する論文を発表する。 現在確定している具体的な計画は以下のとおり。 シンポジウム「Literature Goes to School: The Uses of Literature in Meiji and Taishō Period Classrooms」の開催 日時：2022 年 9 月 3 日（土）14：00-16：00 場所：神奈川大学みなとみらいキャンパス（オンライン併用）	村井まや子	村井まや子・鈴木宏枝・渡部かなえ 〔学外〕菅沼勝彦・大塚奈奈絵・中脇初枝	6	2022 年度は無
13	神奈川の地域と文化	横浜をはじめとする神奈川県のさまざまな地域の文化・歴史・民俗・地理・観光の諸相について、本学に集う様々な領域（観光学、考古学、地理学、民俗学、歴史学など）の研究者たちが集い、それぞれの強みを活かしつつ他の領域の手法からも刺激を受けながら、学際的に探究していく。	♪ 2022 年度 研究会を数回実施（各メンバーから、それぞれの手法とフィールドで神奈川の地域や文化について考察・調査した内容を報告） 第1回 4月27日（Wed）@ Zoom 第2回 9月18日（Sun）～19（Mon）@ MMC17031 ♪ 研究会での報告をすませたメンバーは、順次叢書掲載の原稿の執筆に着手。	平山 昇	平山 昇・小熊 誠・柏木 翔・後田多 敦・島川 崇・安室 知・高井典子・崔 瑛・中林広一・山口太郎・山本志乃・小泉 諒・清水和明・平井 誠 〔学外〕伊藤泉美・市川智生・原 淳一郎	17	検討中 2024 年度予定
14	観光と美術	美術とは、人間が社会を築き、それぞれの歴史、宗教、生活、自然環境から生み出された表現である。最近では地域の歴史遺産や伝統工芸は重要な観光資源としてにわかに注目されてきてはいるが、その活動は一過性のものが多い。本研究グループは、美術（特にファインアート）や工芸デザインの分野に特化し、観光においての功罪を再認識し、その正負の効果を体系化する。美術・工芸デザインの真の美的価値を評価できるアート・リテラシーを向上させることで、観光での活用を持続可能なものにすることが目的である。	1. 国内外の観光地における美術・工芸デザインの活用調査 2. 美術館における観光客誘致の取り組み事例調査 3. 学芸員の役割の変化と観光に与える影響 4. ガイドの質の向上のための高等教育の役割 5. 観光学的アプローチによる美術・工芸デザイン史の再考 6. 美術の視点からの、変えるべきもの、変えないべきものとは 7. 美術分野における観光の功罪の整理	島川 崇	島川 崇・角山朋子・シェラー クインタナ 〔学外〕増子美穂	4	検討中 2023 年度予定

15	言語景観と多文化共生	観光立国日本の多言語表示と情報発信を再考する	1. 本研究には国内外での実地調査が必要不可欠であるため、国内の調査を中心に可能な範囲ですめる。 2. コロナ禍の影響を受け、実地調査は研究開始時の予想どおりにいかなかったが、どのような成果を公開できるか、それらの成果がどのような意義を有するか、随時、整理・蓄積していく。 3. 昨年度同様に、オンライン会議ツールを利用しながら、定期的に研究会を開催し、メンバー間での意思疎通をはかる。 4. 学外から講師を招いてオンライン形式による講演会を開催し、本研究メンバーだけでなく言語景観に関心をよせる学生にも公開する。 5. これらの活動を展開する過程で、言語景観研究を今後どう外国語教育に活用できるかを考察する。	鈴木慶夏	鈴木慶夏・鈴木幸子・佐藤裕美・由川美音・尹 亭仁・高木南欧子・佐藤 梓・羽場久美子 〔非〕 李 忠均・小林 潔	10	検討中 2023 年度 予定
16	国際日本研究	日本文化（社会や歴史、文学、美術、宗教、メディア等を含む）を国際的な視野で、学際的かつ総合的に研究すること	1. メンバー各自の関心に基づく研究会の開催（論文等のドラフトヘフィードバックを提供したりすることを含む）（前・後期 2～3 回ずつ程度） 2. 学外研究者の講演、研究交流（前・後期 1 回ずつ程度）	ジェームズ ウェルカー	ジェームズ ウェルカー・ステファン ブッヘンベルゲル・ソニア チック・大島希巳江・ティネッロ マルコ・クリスチャン ラットクリフ・ワイイー ロ・ブライアン ルパート・シェラー クインタナ・ステファン ヘーブ・知花愛実	11	2022 年度 は無

※活動休止中「越境する比較文化」〔NCH 新聞研究会〕

〔名誉〕名誉教授 〔元教〕本学元教授 〔非〕非常勤講師 〔非助〕非常勤助手 〔学外〕学外研究者

活動休止中

	越境する比較文化	比較文学・文化の方法論を用いた研究を行う。	2022 年度は活動休止	ステファン ブッヘンベルゲル	ステファン ブッヘンベルゲル・クリスチャン ラットクリフ・村井まや子・古屋耕平・大島希巳江・ラブリー エスター・バンキア ジョン ジェームズ 〔学外〕前島志保・島山 寛 〔非〕ポール シャックルフォード	10	2022 年度 は無
	NCH 新聞研究会	神奈川県大学が所蔵する NCH (North China Herald) の新聞 (ONLINE 版) の日本、中国、韓国、東南アジア諸国に関連する新聞記事の研究。	2022 年度は活動休止	孫 安石	孫 安石・岩本典子・村井寛志・泉水英計・山本信太郎 〔元教〕菊池敏夫 〔学外〕土屋和代・渡辺美季	8	2022 年度 は無

神奈川大学人文学研究所叢書一覧

人文学研究所

No.	年度	タ イ ト ル	出版社
1	1982	悲劇——その諸相と人間観	神奈川新聞社
2	1984	日本文化——その自覚のための試論	神奈川新聞社
3	1985	続 日本文化——伝統と近代化の再検討	神奈川新聞社
4	1986	民族と国家——国際関係の視点から	神奈川新聞社
5	1987	「近代」の再検討——ポスト・モダンの視点から	神奈川新聞社
6	1988	いま・日本と中国を考える——日中比較文化論	神奈川新聞社
7	1990	「民族と国家」の諸問題	神奈川新聞社
8	1990	ロマン主義の諸相	神奈川新聞社
9	1991	インディアスの迷宮——1492～1992	勁草書房
10	1992	聖と俗のドラマ	勁草書房
11	1994	秘密社会と国家	勁草書房
12	1995	ヨーロッパの都市と思想	勁草書房
13	1996	国家とエスニシティ——西欧世界から非西欧世界へ	勁草書房
14	1997	芸能と祭祀	勁草書房
15	1998	笑いのコスモロジー	勁草書房
16	1999	ロマン主義のヨーロッパ	勁草書房
17	2000	ジェンダー・ポリティクスのゆくえ	勁草書房
18	2001	日中文化論集——多様な角度からのアプローチ	勁草書房
19	2002	歴史と文学の境界——〈金庸〉の武俠小説をめぐる	勁草書房
20	2003	「明六雑誌」とその周辺——西洋文化の受容・思想と言語	御茶の水書房
21	2004	新しい文化のかたち——言語・思想・くらし	御茶の水書房
22	2005	中国における日本租界——重慶・漢口・杭州・上海	御茶の水書房
23	2006	世界から見た日本文化——多文化共生社会の構築のために	御茶の水書房
24	2007	在日外国人と日本社会のグローバル化——神奈川県横浜市を中心に	御茶の水書房
25	2008	表象としての日本——移動と越境の文化学	御茶の水書房
26	2009	ジェンダー・ポリティクスを読む——表象と実践のあいだ	御茶の水書房
27	2009	中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産	御茶の水書房
28	2010	世界の色の記号——自然・言語・文化の諸相	御茶の水書房
29	2011	〈悪女〉と〈良女〉の身体表象	青弓社
30	2011	グローバル化の中の日本文化	御茶の水書房
31	2012	植民地近代性の国際比較——アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験	御茶の水書房
32	2012	戦後日本と中国・朝鮮——ブランゲ文庫を一つの手がかりとして	研文出版
33	2013	色彩の快——その心理と倫理	御茶の水書房
34	2013	先住民運動と多民族国家——エクアドルの事例研究を中心に	御茶の水書房
35	2014	近現代中国人日本留学生の諸相——「管理」と「交流」を中心に	御茶の水書房
36	2014	近代日本の宗教論と国家——宗教学の思想と国民教育の交錯	東京大学出版会
37	2015	〈68年〉の性——変容する社会と「わたし」の身体	青弓社
38	2015	文化を折り返す——普段着でする人類学	青娥書房
39	2016	破壊のあとの都市空間——ポスト・カタストロフィーの記憶	青弓社
40	2017	帝国とナショナリズムの言説空間——国際比較と相互連携	御茶の水書房
41	2017	新・新猿楽記——古代都市平安京の都市表象史	現代思潮新社
42	2018	中国人留学生と「国家」・「近代」・「愛国」	東方書店
43	2018	自然・人間・神々——時代と地域の交差する場	御茶の水書房
44	2019	男性性を可視化する——〈男らしさ〉の表象分析	青弓社
45	2020	近世村落の領域と身分	吉川弘文館
46	2021	明治から昭和の中国人日本留学の諸相	東方書店
47	2021	アフリカン・アメリカン児童文学を読む	青弓社
48	2022	学びの見える化の理論と実際——教育イノベーションにむけて	勁草書房
49	2022	A Sense of Plausibility in vision and music perception	朝倉書店